茨城県教育財団文化財調査報告第205集

岡の宮遺跡

国補特一第14－03－064－0－052号
埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県土浦土木事務所
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第205集

岡の宮遺跡

国補特一第14－03－064－0－052号
埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県土浦土木事務所
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，長期的な展望のもとに，産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と，県土の普遍的な発展を図るために，交通体系の整備を進めております。一般国道125号道路改良工事もその一環として計画されたもので，その予定地内には岡の宮遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県土浦土木事務所と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び，平成13年８月から９月まで岡の宮遺跡の発掘調査を実施してまいりました。この調査によって貴重な遺構，遺物を検出することができました。

本書は，岡の宮遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより，教育，文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県から多大なるご協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，新治村教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，衷心より感謝の意を表します。

平成15年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成13年度に発掘調査した，茨城県新治郡新治村大字高岡に所在する岡(おか)の宮(みや)遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下の通りである。

調　査　　平成13年８月１日～平成13年９月30日

整　理　　平成15年１月１日～平成15年３月31日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第一課長阿久津久の指揮のもと，同課調査第１班長海老澤稔，主任調査員浅野和久，調査員梅澤貴司が担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理第一課長川井正一の指揮のもと，主任調査員浅野和久が担当した。

5　発掘調査及び整理に際し，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を用いて区画し，Ｘ軸＝＋14,280ｍ，Ｙ軸＝＋28,200ｍの交点を基準点（Ａ１a1）とした。なお，この原点は，日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40ｍ四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４ｍ四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…，西から東へ１，２，３…とし，その組み合わせで「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。さらに，小調査区も同様に北から南へａ，ｂ，ｃ…ｊ，西から東へ１，２，3…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠し，「Ａ１a1」のように呼称した。

2　抄録の北緯及び東経の覧には，世界測地系に基づく緯度・経度を（　）を付けて併記した。

3　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次の通りである。

遺構　　ＳＩ―住居跡　　ＳＫ―土坑　　ＳＤ―溝　　ＳＥ―井戸

遺物　　ＤＰ―土製品　　Q―石器・石製品　　M―金属製品　　ＴＰ―拓本土器

土層　　K―撹乱

4　遺構及び遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

□ 炉・焼土・赤彩　　■ 竈・粘土・黒色処理

●土器　　○土製品　　□石器・石製品　　△金属製品・古銭

－―－―－ 硬化面

5　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量で記述した。

6　遺構・遺物実測図の掲載方法については，以下のとおりである。

(1)　遺構全体図は縮尺300分の１とし，各遺構の実測図は，60分の１の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は，原則として３分の１に縮尺した。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

7　「主軸方向」は，竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N-10°-E）。

8　遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1)　遺物番号は，土器，拓本のみ掲載の土器片，土製品，石製品，金属製品ごとに通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号は同一とした。

(2)　土器の計測値の単位はcm及びｇである。

(3)　備考の覧は，土器の現存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

9　遺構一覧表・遺物観察表等における計測値のうち，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

抄　　録

ふりがな	おかのみやいせき
書名	岡の宮遺跡
副書名	国補特一第14－03－064－0－052号埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第 205 集
編著者名	浅野和久
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の2　TEL 029(225)6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の2　TEL 029(225)6587
発行年月日	2003(平成15)年３月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
岡の宮遺跡（おかみやいせき）	茨城県新治郡新治村大字高岡1950番地の1ほか（いばらきけんにいはりぐんにいはりむらおおあざたかおか）	08465 － 018	36度 07分 41秒 (36度 07分 42秒)	140度 08分 51秒 (140度 08分 39秒)	32 ～ 37 m	20010801 ～ 20010930	446.21㎡	一般国道125号道路改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡の宮遺跡	集落跡	弥生（後期）	竪穴住居跡　1軒	弥生土器片（広口壺）	地山を掘り残して構築された施設を持つ奈良時代の住居跡が確認されている。中世の土坑からは，未焼成の土師質土器が出土している。また，井戸跡からは懸仏片が出土している。
		古墳（後期）	竪穴住居跡　5軒	土師器（坏・椀・高坏・甕・甑），土製品（紡錘車・支脚）	
		奈良・平安	竪穴住居跡　8軒	土師器（坏・甕・甑），須恵器（坏・蓋・高台付坏・甕・甑・円面硯），石製品（軽石），金属製品（刀子・鉄鏃）	
		近世	土坑　1基	土師質土器（内耳土鍋）	
		時期不明	竪穴住居跡　2軒 土坑　19基 井戸跡　1基 溝　2条	金属製品（懸仏）	

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 8
　　１　弥生時代の遺構と遺物 …… 8
　　⑴　竪穴住居跡 …… 8
　　２　古墳時代の遺構と遺物 …… 9
　　⑴　竪穴住居跡 …… 9
　　３　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 21
　　⑴　竪穴住居跡 …… 21
　　４　近世の遺構と遺物 …… 36
　　⑴　土坑 …… 36
　　５　その他の遺構と遺物 …… 37
　　⑴　竪穴住居跡 …… 37
　　⑵　井戸跡 …… 39
　　⑶　溝 …… 40
　　⑷　土坑 …… 42
　　⑸　遺構外出土遺物 …… 44
　第４節　まとめ …… 46
写真図版

第1章　調 査 経 緯

第1節　調査に至る経緯

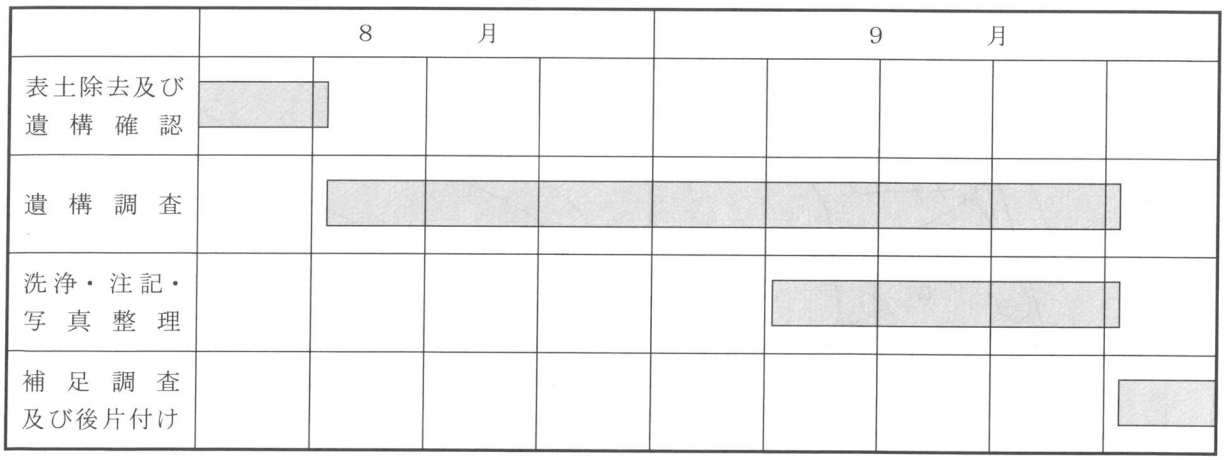
茨城県は，長期的な展望のもとに産業・経済発展に伴う広域流通機構の整備と，県土の普遍的な発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めている。一般国道125号道路改良工事もその一環を構成するものである。

工事に先立ち，平成12年５月25日，茨城県は，茨城県教育委員会教育長あてに，工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は，平成12年６月１日に現地踏査，同年10月17日に試掘調査を実施し，同年10月25日工事予定地内に岡の宮遺跡が所在する旨を茨城県に回答した。翌平成13年１月16日，茨城県は，茨城県教育委員会に，文化財保護法第57条に基づく土木工事等の通知を提出した。茨城県教育委員会教育長は，当遺跡の重要性に鑑み，また，文化財保護の立場から慎重に検討を重ね，同年１月24日，茨城県に現状保存が困難であることから，工事着手前に発掘調査を実施し，記録保存とするよう通知した。同年２月15日，茨城県は，茨城県教育委員会教育長に事業地内における埋蔵文化財（岡の宮遺跡）についての協議書を提出し，同年２月26日，茨城県教育委員会教育長は，発掘調査の範囲及び面積等について回答を行い，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

そこで，茨城県から財団法人茨城県教育財団に当遺跡の発掘調査の依頼があり，茨城県土浦土木事務所と茨城県教育財団は，埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成13年８月１日から同年９月30日にかけて，岡の宮遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

岡の宮遺跡の発掘調査は，平成13年８月１日から平成13年９月30日までの２か月間にわたって実施した。以下，調査の経過について，その概要を表で記載する。



第１図　岡の宮遺跡全体図

第２章　位 置 と 環 境

第１節　地 理 的 環 境

岡の宮遺跡は，茨城県新治郡新治村大字高岡1950番地の1ほかに所在している。

新治村の地形は，筑波山塊からつづく北部の丘陵地と中央部の台地，南部の沖積地のほぼ三つの地域に分かれる。台地は筑波山塊の南東山麓から霞ヶ浦へ向かって突出し半島状を呈する新治台地に属しており，新治村にかかる部分はその南部に位置する。台地上は，ところどころに起伏を有しているが，ほぼ平坦であり，標高は25～37ｍである。その北部を天の川が東流している。台地と南部の沖積地との境は急崖となっており，比高約20ｍである。その沖積地を桜川が東流している。

台地の地質は，新生代第四紀に形成された成田層の上部に，鹿沼軽石と東京軽石を含む関東ローム層，黒色土が堆積して成立したものである。

当遺跡は，新治村の南西部の，桜川左岸の沖積地に接した標高 32 ｍの台地縁辺部に位置している。調査前の現況は山林である。

第２節　歴 史 的 環 境

当村周辺は，筑波山を仰ぎ，桜川や天の川など水運にも恵まれ，変化に富んだ地形から，古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきた。そのため，村内には数多くの遺跡が存在している。ここでは，岡の宮遺跡に関連する主な遺跡について，時代別に述べることにする。

（１）縄文時代

桜川と天の川に挟まれた台地上には，縄文時代早期の小高天神遺跡〈２〉，前期から中期の大畑新田遺跡〈３〉がみられ，中期から後期には大畑本田貝塚〈４〉が形成された。桜川左岸の低地に接した台地縁辺部には，前期の上坂田寺貝塚〈５〉，後期から晩期の下坂田貝塚〈６〉，時期は明らかではないが北坂田貝塚〈７〉などがある。

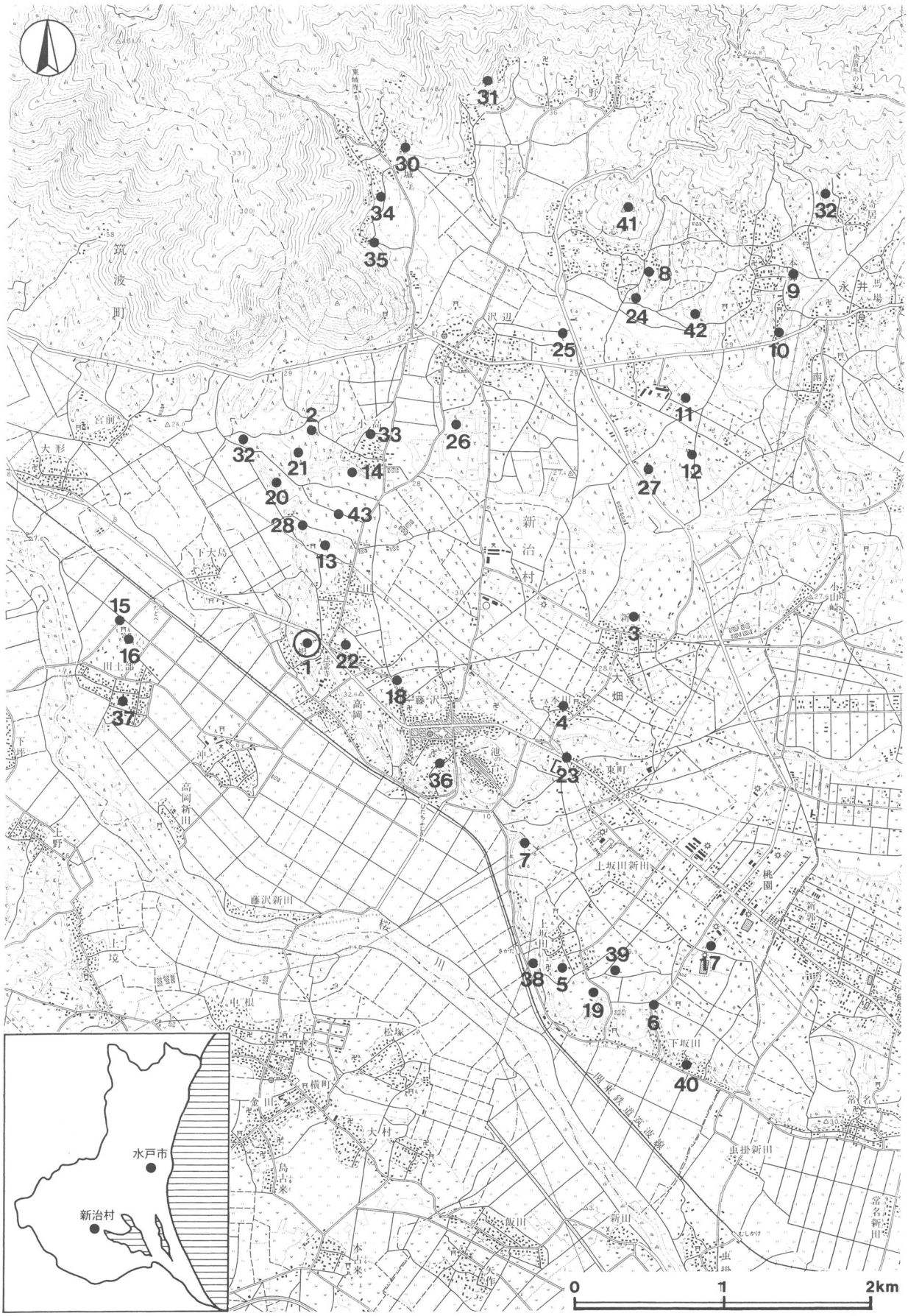
（２）弥生時代

桜川左岸の藤沢地区や小高地区で弥生土器が表採されている。天の川流域には，大志戸台地遺跡〈８〉，本郷宮後遺跡〈９〉，本郷五畳遺跡〈10〉，本郷町田向遺跡〈11〉，本郷原山遺跡〈12〉などがあり，そのうち本郷原山遺跡では後期後半期の竪穴住居跡７軒の調査が行われている[1)]。

（３）古墳時代

古墳時代にはいると，桜川・天の川両河川の流域に数多くの古墳がつくられるようになる。この時代の集落遺跡は多いと思われるが，調査例は少ない。調査が行われた遺跡としては，当遺跡から約700ｍ北に位置する田宮梶の宮遺跡〈13〉があり，平成６年に古墳時代前期の竪穴住居跡２軒が確認されている[2)]。

古墳及び古墳群，方形周溝墓は，桜川流域には，小野熊野塚遺跡〈14〉，田土部稲荷古墳〈15〉，田土部明神古墳群〈16〉，坂田稲荷山古墳群〈17〉，高岡根古墳〈18〉，武者塚古墳〈19〉，高崎山古墳群〈20〉，小高寄居古墳群〈21〉，田宮古墳群〈22〉，藤沢東町古墳群〈23〉及び上坂田貝塚の方形周溝墓がある。また，天の川流域には大志戸古墳群〈24〉，沢辺稲荷古墳群〈25〉，沢辺南方古墳群〈26〉，本郷原山古墳群〈27〉などがある。



第２図　岡の宮遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院２万５千分の１「常陸藤沢」)

表１　岡の宮遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	時代						番号	遺跡名	遺跡番号	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
①	岡の宮遺跡	018			○	○	○	○	23	藤沢東町古墳群	101				○		
2	小高天神遺跡	039	○	○	○	○			24	大志戸古墳群	068				○		
3	大畑新田遺跡	079		○	○	○			25	沢辺稲荷古墳群	036				○		
4	大畑本田貝塚	114		○					26	沢辺南方古墳群	032				○		
5	上坂田寺貝塚	103		○	○				27	本郷原山古墳群	053				○		
6	下坂田貝塚	104		○	○				28	田宮窯跡	115					○	
7	北坂田貝塚	102		○	○				29	永井寄居窯跡	107					○	
8	大志戸台地遺跡	086			○	○			30	東城寺窯跡	072					○	
9	本郷宮後遺跡	076			○		○		31	小野窯跡	043					○	
10	本郷五畳遺跡	077			○	○			32	小高窯跡	100					○	
11	本郷町田向遺跡	087		○	○	○			33	小高村内窯跡	106					○	
12	本郷原山遺跡	020			○		○		34	東城寺桑木窯跡	073					○	
13	田宮梶の宮遺跡	2067		○		○	○		35	東城寺寄居窯跡	105					○	
14	小野熊野塚遺跡	108				○			36	藤沢城跡	019						○
15	田土部稲荷古墳	024				○			37	田土部館跡	074						○
16	田土部明神古墳群	111				○			38	峯台館跡	010						○
17	坂田稲荷山古墳群	112				○			39	上坂田館跡	075						○
18	高岡根古墳	113				○			40	下坂田館跡	005		○				○
19	武者塚古墳	070				○			41	甲山城跡	067						○
20	高崎山古墳群	038				○			42	本郷館跡	046						○
21	小高寄居古墳群	109				○			43	榎木平遺跡	028				○	○	○
22	田宮古墳群	025				○											

古墳の大半は後期のものである。

集落遺跡に対して方形周溝墓や古墳群は，武者塚古墳，上坂田貝塚の方形周溝墓，田宮古墳群，高崎山古墳群の調査例がある。武者塚古墳はみずらが出土したことで知られており[3]，上坂田貝塚からは古墳時代前期の方形周溝墓が確認され，小形器台と共に底部が穿孔された壺形土器が出土している。高崎山古墳群では前方後円墳２基と円墳９基が確認されている[4]。田宮古墳群では古墳時代後期の古墳４基が調査されており[5]，当遺跡から東へ約300mのところに位置していることから，同時期の竪穴住居跡が確認されている当遺跡との関係が考えられる。

（４）奈良・平安時代

律令制下の新治村域は，筑波郡栗原郷に属していた。この時期の遺跡は，村内全域にわたり，古墳時代と同様に数多く確認されている。集落遺跡として当遺跡に最も近い田宮梶の宮遺跡では，９軒の竪穴住居跡が確認されており[6]，当遺跡の同時代の遺構との関係が考えられる。また，田宮梶の宮遺跡に隣接して新治窯跡群を構成する田宮（たみや）窯跡〈28〉がある。新治窯跡群は，天の川中流の土浦市栗山窯を最古として，その後，永井寄居（ながいよりい）窯跡〈29〉，東城寺（とうじょうじ）窯跡〈30〉，小野（おの）窯跡〈31〉と展開する窯跡群である。上記の窯跡に加えて，田宮窯跡と同じく桜川左岸に位置する小高（おだか）窯跡〈32〉，小高村内（おだかそんない）窯跡〈33〉，東城寺地区周辺の東城寺窯跡，東城寺桑木（とうじょうじくわき）窯跡〈34〉，東城寺寄居（とうじょうじよりい）窯跡〈35〉と広範囲にわたり，新治窯跡群として認識される大窯跡群である。当遺跡出土の須恵器は大半が新治窯跡産と考えられる。

（5）中世・近世

筑波山塊の南東山麓に古い歴史を有する東城寺がある。その境内からは常陸国分寺の瓦と同笵の瓦が，また，寺の裏山の東城寺経塚群からは経筒が出土している。それ以降，中世になると法雲寺をはじめ多くの寺院が建立され，仏教文化の展開がみられる。また，この時期，村内の歴史は小田城を拠点とする小田氏を中心に推移する。桜川流域には，藤沢城跡〈36〉，田土部館跡〈37〉，峯台館跡〈38〉，上坂田館跡〈39〉，下坂田館跡〈40〉，天の川左岸には，甲山城跡〈41〉，本郷館跡〈42〉といった城館が築かれている。藤沢城跡は当遺跡から約1200m南東の同台地上縁辺部，田土部館跡は約1200m南西の桜川沿いの低地に位置している。当遺跡から約800m北の榎木平遺跡〈43〉では，竪穴遺構から中世前半期の埋納銭が出土している。

※　文中の〈　〉内の番号は，表1，第1図の該当番号と同じである。

註

1）本郷原山五反田遺跡発掘調査会　『本郷原山五反田遺跡』　1993年4月

2）田宮梶の宮遺跡発掘調査会　『田宮梶の宮遺跡発掘調査報告書』　2001年3月

3）新治村教育委員会　『武者塚古墳』　1986年3月

4）山武考古学研究所　新治村教育委員会　『茨城県新治村高崎山古墳群西支群第2号墳・第3号墳』　2001年3月

5）斉藤弘道　「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　田宮古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第57集　1990年3月

6）5）に同じ

参考文献

・竹内理三　『角川日本地名大辞典　8茨城県』　角川書店　1983年

・中山信名（栗田寛　補訂）『新編常陸国誌』　崙書房　1997年

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

岡の宮遺跡は，弥生時代から中・近世にわたる複合遺跡である。

検出された遺構は，弥生時代の竪穴住居跡１軒，古墳時代後期の竪穴住居跡５軒，奈良・平安時代の竪穴住居跡８軒，近世の土坑１基，時期不明の竪穴住居跡２軒，土坑19基，井戸跡１基，溝２条である。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に18箱出土している。主な遺物は，弥生土器（広口壺），土師器（坏・高坏・椀・甕・甑），須恵器（坏・蓋・高台付坏・甕・甑・円面硯），土師質土器（内耳鍋），陶器，石器及び石製品（敲石・軽石），土製品（紡錘車・支脚），金属製品（刀子・鉄鏃・懸仏）等である。

第2節　基本層序

当遺跡の東部（Ｂ３c6区）にテストピットを設定し，深さ３ｍまで掘り下げて，土層堆積状況を確認した。（第３図）

第１層は，70cm前後の厚さで，黒褐色の耕作土層である。

第２層は，28～40cmの厚さで，褐色のソフトローム層である。

第３層は，14～32cmの厚さで，スコリアを微量含みクラックの発達した，褐色のローム層である。

第４層は，28～40cmの厚さで，スコリアを微量含みクラックの発達した，にぶい褐色のハードローム層である。

第５層は，20～25cmの厚さで，明褐色のハードローム層である。

第６層は，18～26cmの厚さで，赤色スコリアを微量含む，明褐色のハードローム層である。

第７層は，25～38cmの厚さで，鹿沼パミスを少量含む，にぶい褐色のローム層である。

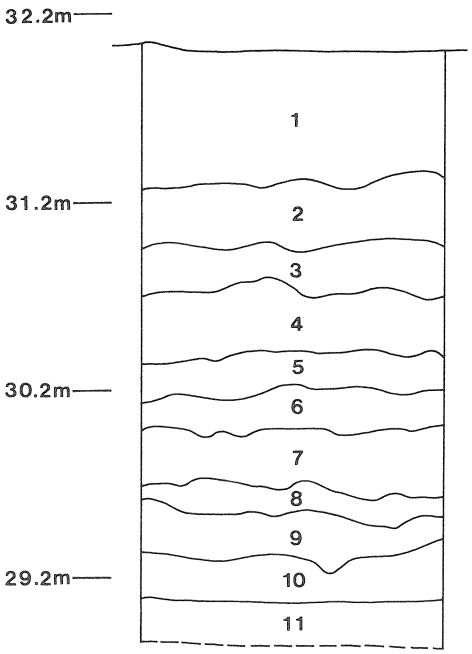
第８層は，10～18cmの厚さで，鹿沼パミスを中量含む，橙色のハードローム層である。

第９層は，12～32cmの厚さで，鹿沼パミスを中量含む，にぶい褐色のハードローム層である。

第10層は，14～32cmの厚さで，鹿沼パミスを少量含む，にぶい褐色のハードローム層である。

第11層は，灰褐色の砂層である。

住居跡・土坑等の遺構は，第２層上面で確認した。



第３図　基本土層図

第3節　遺構と遺物

1　弥生時代の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

今回の調査によって，竪穴住居跡１軒を確認した。以下，その特徴や遺物について記載する。

第２号住居跡（第４・５図）

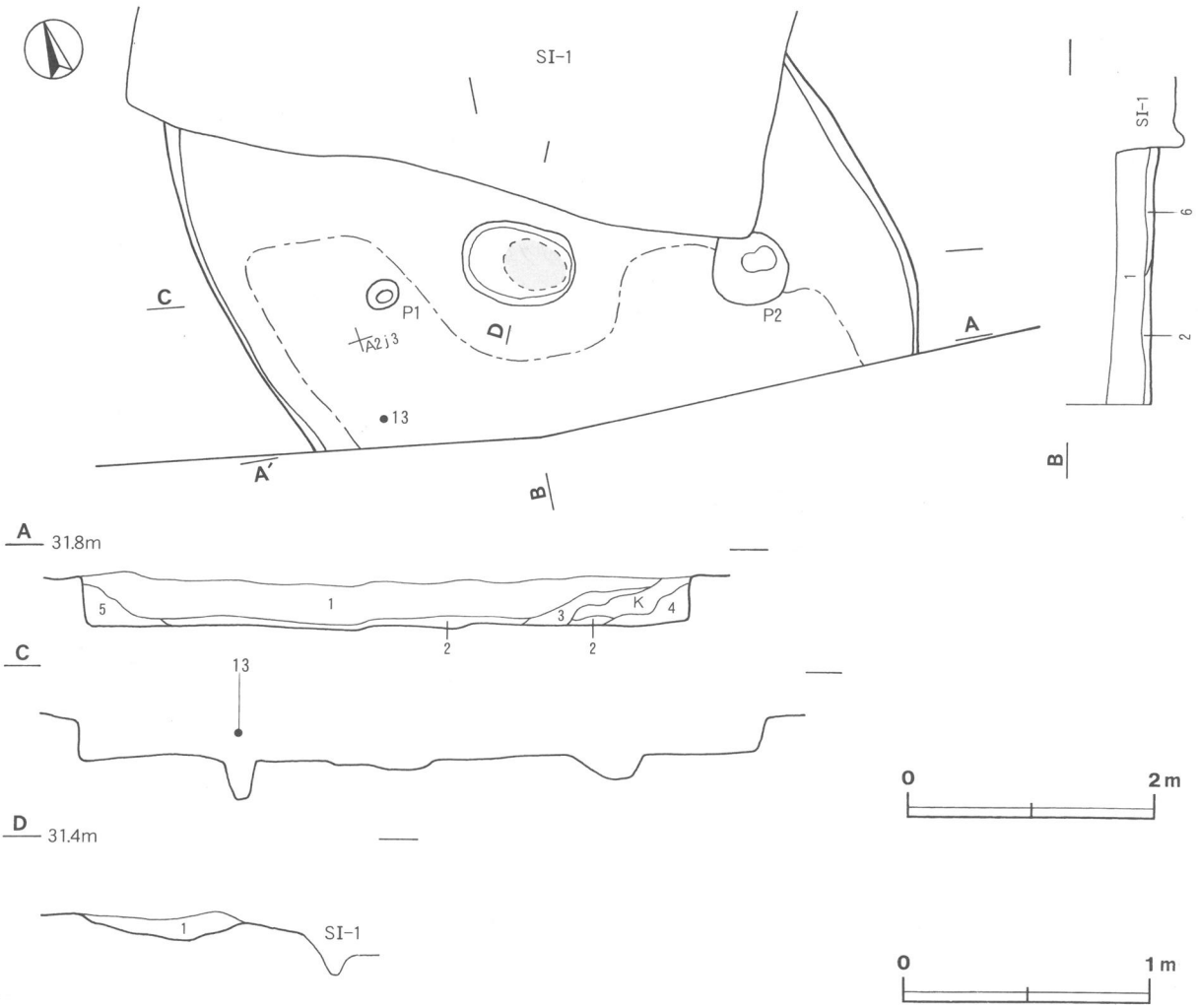
位置　調査区の西部，Ａ２j3区。

重複関係　第１号住居跡に北部を掘り込まれている。

規模と形状　北部を第１号住居跡に掘り込まれており，また南部が調査区域外になるため，平面形及び主軸方向は不明である。東西軸は5.15m，残存する南北軸は2.55mである。壁高は28～34cmで，直立している。

床　小さな凹凸があるが，ほぼ平坦である。炉の周囲から確認された壁際付近までに硬化面が認められた。

ピット　２か所。Ｐ１・Ｐ２ともにその性格は不明である。



第４図　第２号住居跡実測図

炉　東西軸線上のほぼ中央に位置し，長径92cm，短径66cmの楕円形で，床面を10cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量

覆土　6層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量
3　黒 褐 色　ロームブロック微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量
5　暗 褐 色　ロームブロック微量
6　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物　弥生土器片20点，土製品１点が出土している。第５図13の広口壺は，西壁寄りの覆土中層から，TP 1の広口壺は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から弥生時代後期と考えられる。

第５図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第５図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	弥生土器	広口壺	－	(10.7)	[7.0]	長石・石英	にぶい褐色	普通	直前段多条，底部付近は無文，底部木葉痕。	覆土中層	20%　PL4
TP1	弥生土器	広口壺	－	(2.0)	－	長石・石英	橙	普通	口唇部に縄文，直下に隆帯を巡らしている。	覆土中	

2　古墳時代の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

古墳時代後期の竪穴住居跡５軒を確認した。以下，その特徴や遺物について記載する。

第１号住居跡（第６～８図）

位置　調査区の西部，Ａ２i3区。

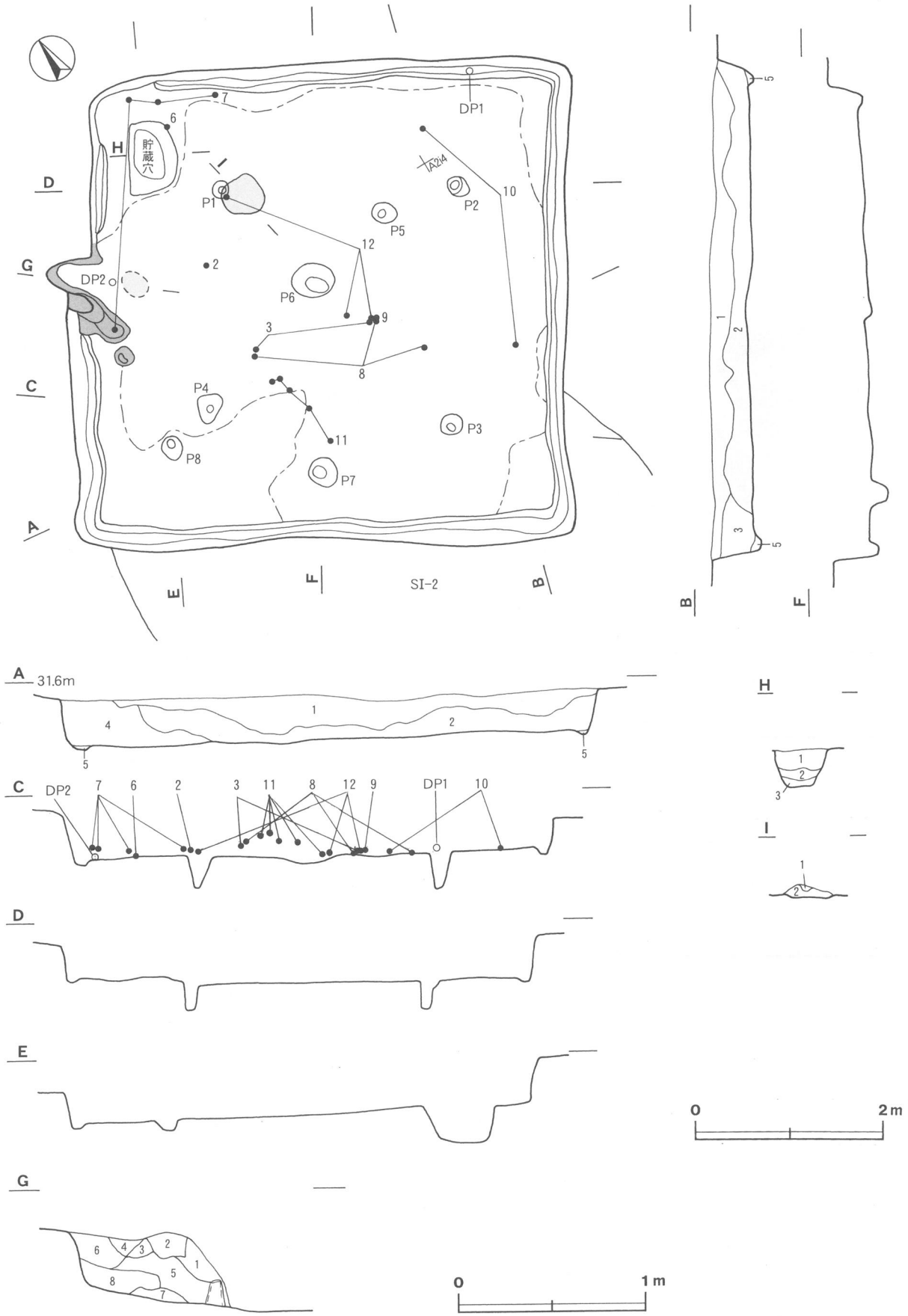
重複関係　第２号住居跡の北部を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸5.35m，短軸5.10mの方形で，主軸方向はN－58°－Wである。壁高は35～55cmであり，全体にほぼ直立している。

床　ほぼ平坦である。各コーナー部を除いて全体的に踏み固められている。北コーナー部を除いて各壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅21～30cm，下幅７～22cm，深さ５～10cmで，断面形はU字形をしている。

ピット　８か所。Ｐ１～Ｐ４は，隣り合うものどうしを結んだ線が対応する各壁とほぼ平行で方形となり，主柱穴と考えられる。主柱穴の深さは33cm～46cmである。Ｐ５～Ｐ８の性格は不明である。北コーナー部に貯蔵穴が確認された。貯蔵穴の平面形は楕円形で，規模は長径78cm，短径54cm，深さ42cmである。

貯蔵穴土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量
3　暗 褐 色　ロームブロック微量



第６図　第１号住居跡実測図

焼土塊土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・砂微量　　2　赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・砂微量

竈　北西壁のほぼ中央部に付設されている。木根により右袖部は壊されている。袖部は礫をやや多く含む砂質粘土で構築されている。規模は，煙道部から焚口部まで110cm，左袖部の最大幅が30cm，壁外への掘り込みは26cmである。火床面は床面を６cmほど掘りくぼめており，皿状をしている。袖部の内壁及び火床面は被熱を受けてわずかに赤変しているが，硬化したところは認められない。煙道の平面形は逆U字形で，煙道は外傾している。

竈土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・砂質粘土粒子少量
2　灰 褐 色　砂質粘土ブロック・礫中量，ローム粒子少量
3　にぶい褐色　ロームブロック・砂質粘土ブロック少量
4　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂質粘土ブロック微量
5　暗 褐 色　ロームブロック・砂質粘土粒子少量，礫微量
6　灰 褐 色　砂質粘土粒子少量，焼土ブロック微量
7　黒 褐 色　焼土ブロック・炭化物中量，ローム粒子少量
8　黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土ブロック・砂質粘土ブロック微量

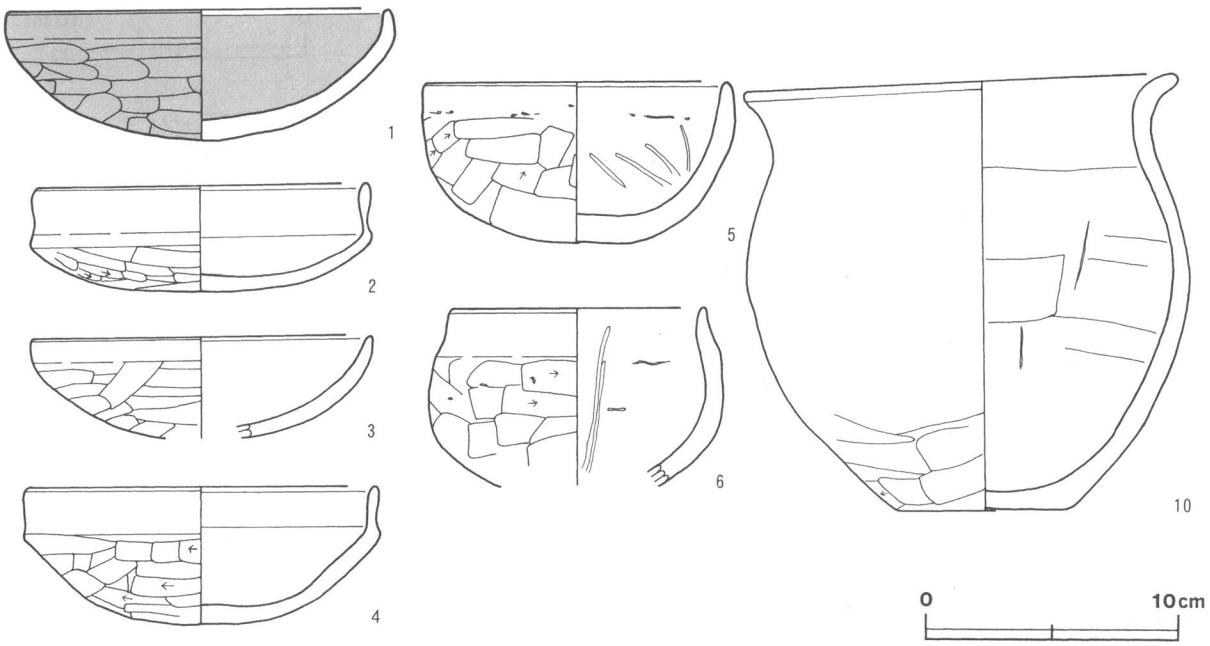
覆土　５層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

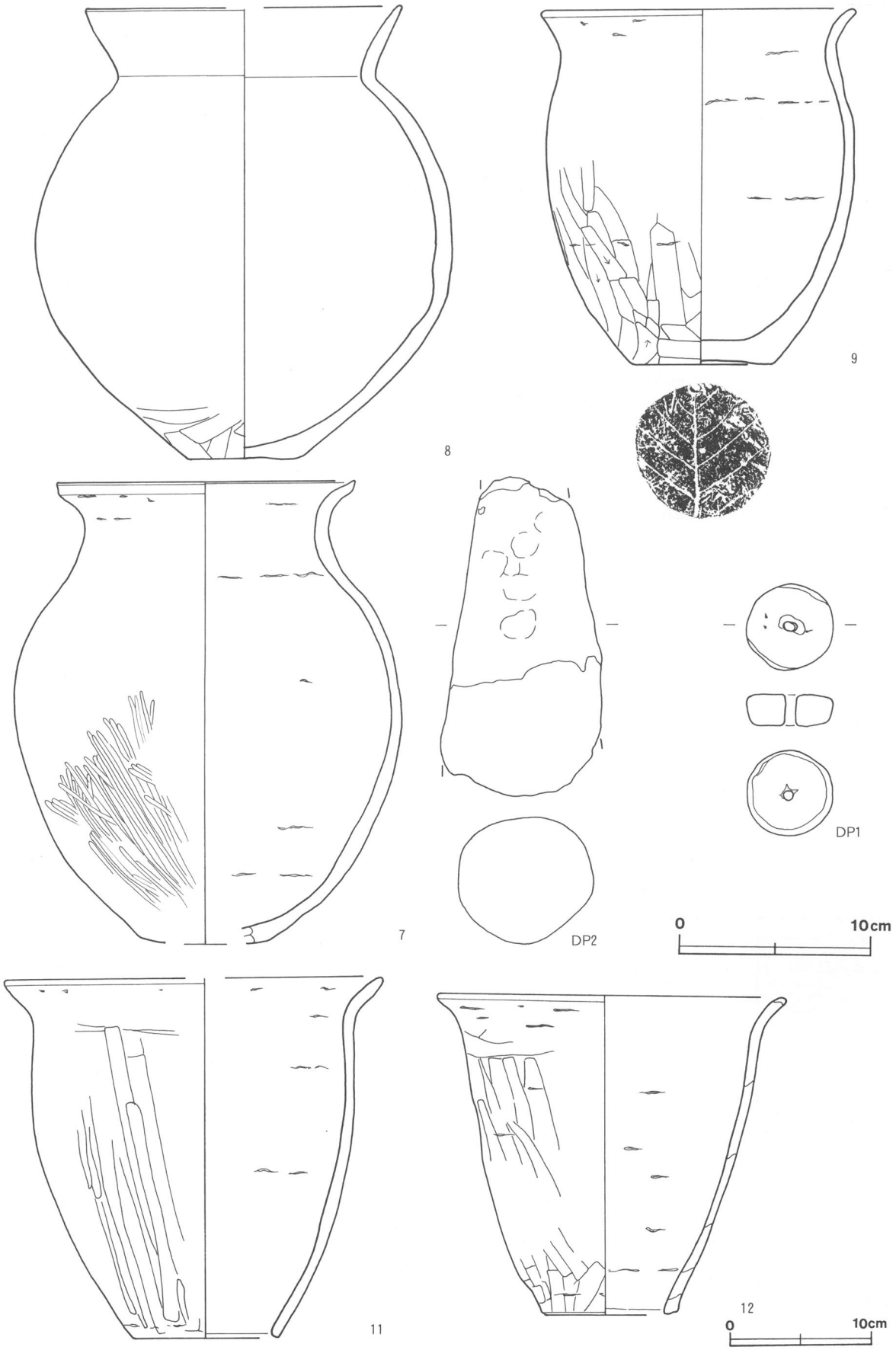
1　黒 褐 色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　ロームブロック多量
3　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量
5　暗 褐 色　ロームブロック多量

遺物　土師器片1045点，土製品２点が出土している。土師器は細片が多く，そのうち覆土中層から出土した破片と覆土下層から出土した破片がよく接合している。第７図６の土師器椀は北コーナー部近くの床面から出土している。第８図７の土師器甕は北コーナー部から傾いた状態で，第７図２の土師器坏は中央部から竈寄り，第８図９の土師器小形甕は中央部から，第７図10の土師器小形甕は北東壁及び南東壁のそれぞれ覆土下層から出土している。３の土師器坏及び第８図８の土師器小形甕は中央部，11の土師器甑は南西壁寄りのそれぞれ覆土下層から覆土中層にかけて出土している。12の土師器甑は中央部及び北コーナー部寄りの覆土下層，そして貯蔵穴の覆土中から出土している。第７図１の土師器坏と５の土師器椀は竈の袖部中から出土している。４の土師器坏は覆土中から出土している。第８図 DP ２の支脚は竈内の火床付近に正位で出土し，被熱を受けて赤変している。DP １の紡錘車は東コーナー部寄りの北東壁際の覆土下層から出土している。

所見　出土土器は，覆土中層から出土した破片と覆土下層から出土した破片が接合することから，短期間で埋められたことが想定される。時期は，出土土器から古墳時代後期（６世紀後葉）と考えられる。



第７図　第１号住居跡出土遺物実測図（１）



第８図　第１号住居跡出土遺物実測図（２）

第１号住居跡出土遺物観察表（第７・８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	15.0	5.2	－	雲母・長石・石英	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	竈袖部中	95%黒色処理 PL4
2	土師器	坏	12.9	4.2	－	雲母・長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	覆土下層	70% PL4
3	土師器	坏	13.6	4.0	－	雲母・石英・赤色粒子	褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	覆土下層	70% PL4
4	土師器	坏	13.9	5.4	－	雲母・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	覆土中	60% PL4
5	土師器	椀	11.8	6.5	－	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	竈袖部中	50% PL4
6	土師器	椀	10.0	(7.1)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り。	床面	40% PL4
7	土師器	甕	20.7	32.3	〔8.4〕	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面下端ヘラ磨き。	覆土下層	70% PL4
8	土師器	甕	〔16.6〕	23.2	5.8	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面下端ヘラ削り後ナデ。	覆土下層	70% PL5
9	土師器	甕	16.5	18.7	7.3	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面縦位のヘラ削り。	覆土下層	70% PL5
10	土師器	甕	17.2	17.3	7.0	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面下端ヘラ削り，内面ヘラナデ。	覆土下層	80% PL5
11	土師器	甑	17.7	(23.3)	－	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り後ナデ。	覆土下層	40% PL5
12	土師器	甑	24.1	22.8	8.2	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面縦位のヘラナデ，下端縦位のヘラ削り。	覆土下層	60% PL5

番号	器種	長さ	最大径	厚さ	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
DP1	紡錘車	－	4.5	1.7	45.1	土製	無文，体部外面ナデ。	覆土下層	PL12
DP2	支脚	(16.7)	8.3	6.7	939.3	土製	側面ナデ。	火床	PL12

第11号住居跡（第９・10図）

位置　調査区の東部，Ｂ３b2 区。

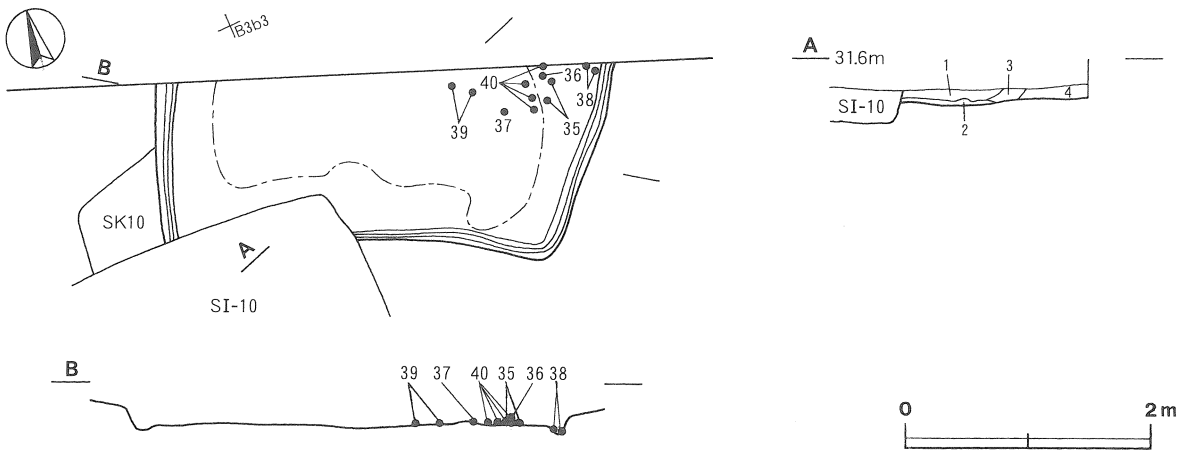
重複関係　第10号土坑の東部を掘り込み，第10号住居跡に南西コーナー部を掘り込まれている。

規模と形状　北部が調査区域外になるため，規模と平面形及び主軸方向は不明である。東西軸は3.65mであり，確認できた南北軸は1.36mである。壁高は11～16cmで外傾している。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。確認された各壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅６～18cm，下幅３～５cm，深さ５～10cmで，断面形はU字形をしている。

覆土　４層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

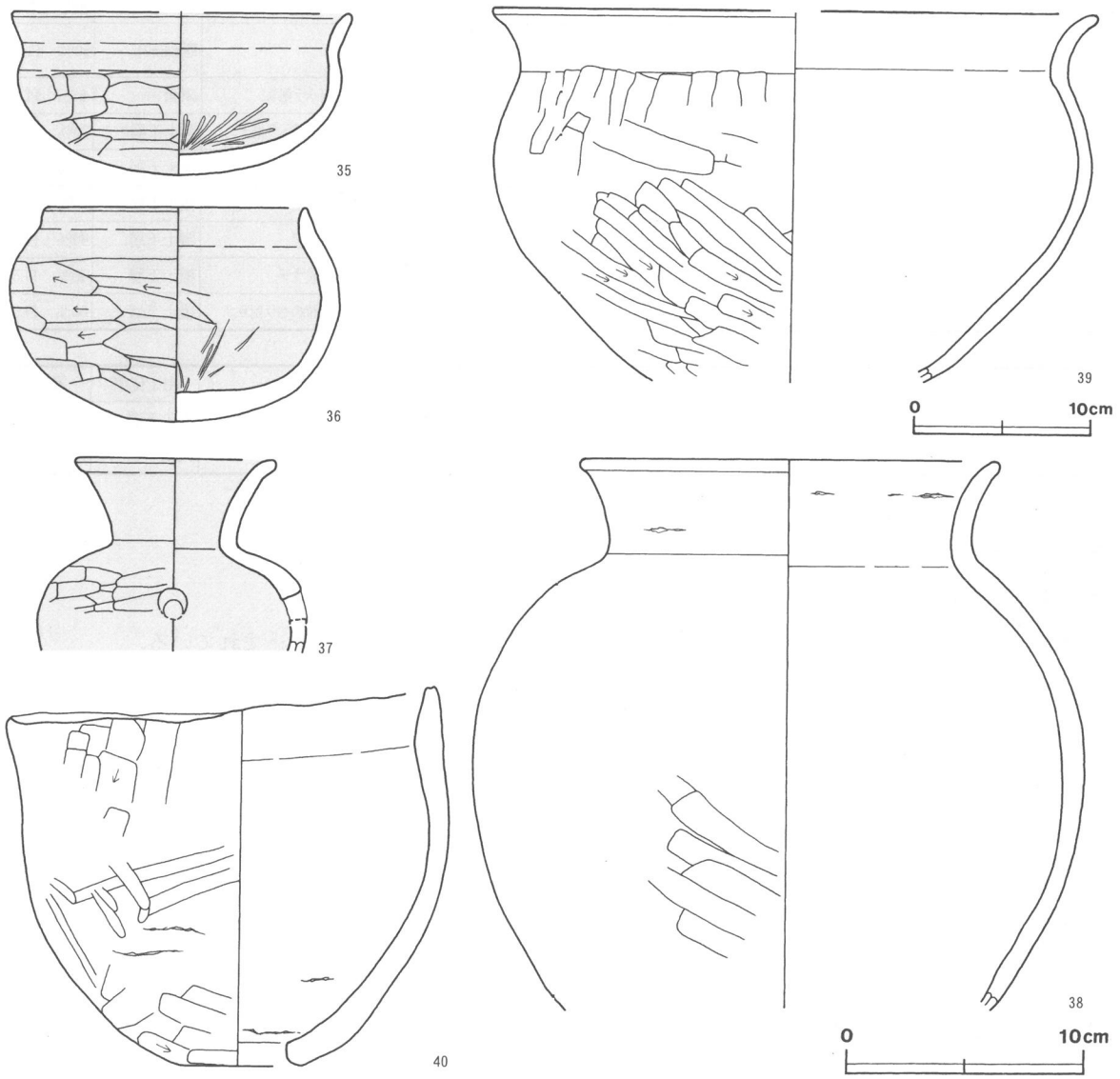
土層解説
1　暗褐色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック微量
4　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量



第９図　第11号住居跡実測図

遺物　土師器片64点，不明土製品１点が出土している。遺物は東壁寄りから壁際にかけてまとまって出土している。第10図35の土師器坏，36の土師器椀，37の土師器瓶，39の土師器甕は東壁寄りの，38の土師器甕は東壁際のそれぞれ覆土下層から出土している。40の土師器甑は東壁寄りの覆土下層から覆土中層にかけて出土している。

所見　時期は，出土土器から古墳時代後期（５世紀後葉）と考えられる。



第10図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
35	土師器	坏	[14.3]	6.9	—	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面放射状のヘラ磨き。	覆土下層	60%　赤彩 PL6
36	土師器	椀	11.0	9.0	—	雲母・長石・石英	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	覆土下層	95%　赤彩 PL6
37	土師器	瓶	8.4	(8.1)	—	雲母・長石・石英	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り後ナデ。	覆土下層	40%　赤彩 PL6
38	土師器	甕	17.7	(23.3)	—	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り後ナデ。	覆土下層	40%　PL6
39	土師器	甕	[34.2]	(21.0)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	頸部ヘラナデ，体部外面斜位のヘラ削り。	覆土下層	30%　PL6
40	土師器	甑	18.0	16.2	5.0	雲母・長石・石英	赤	普通	体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。	覆土下層	90%　PL5

第13号住居跡（第11・12図）

位置　調査区の東部，Ｂ３d7 区。

重複関係　東部を第15号住居跡に掘り込まれ，西部に撹乱を受けている。

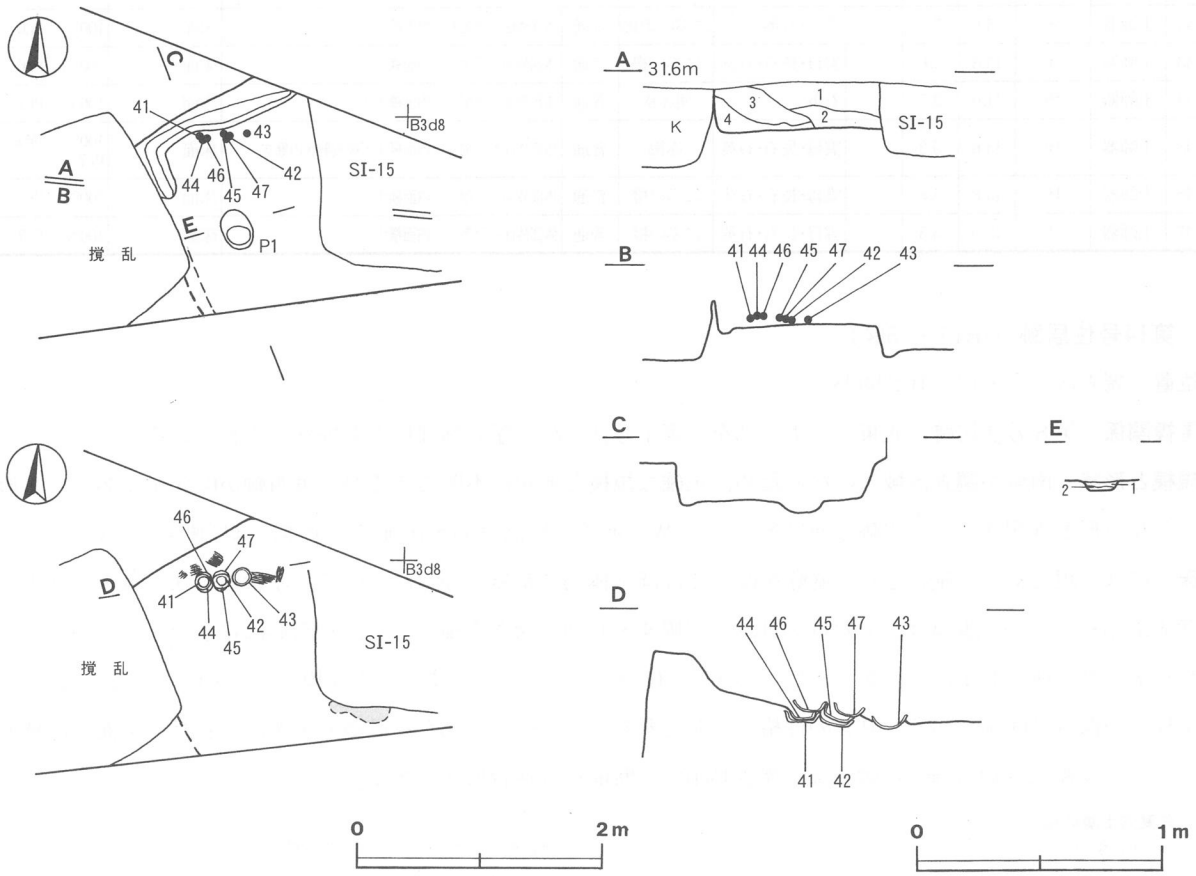
規模と形状　西部の撹乱と東部が第15号住居跡と重複していること，さらに，南部及び東部が調査区域外にかかるため，平面形と規模及び主軸方向は不明である。確認された北壁下に壁溝が巡るが，その底部が西部の撹乱手前で南へほぼ直角におれることから，そこがコーナー部と考えられる。確認された壁高は30～40cmであり，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦である。特に硬化面は認められなかった。南東部の第15号住居跡との境際に被熱を受けうすく赤変した面が確認された。北壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅15～22cm，下幅５～12cm，深さ５cmほどで，断面形はU字形をしている。

ピット　１か所。Ｐ１の深さは12cmで，その性格は不明である。

覆土　４層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。北壁際の覆土下層から炭化物が出土している。また，西壁際の覆土中層から下層にかけて焼土粒子及び炭化粒子が比較的多くみられる。

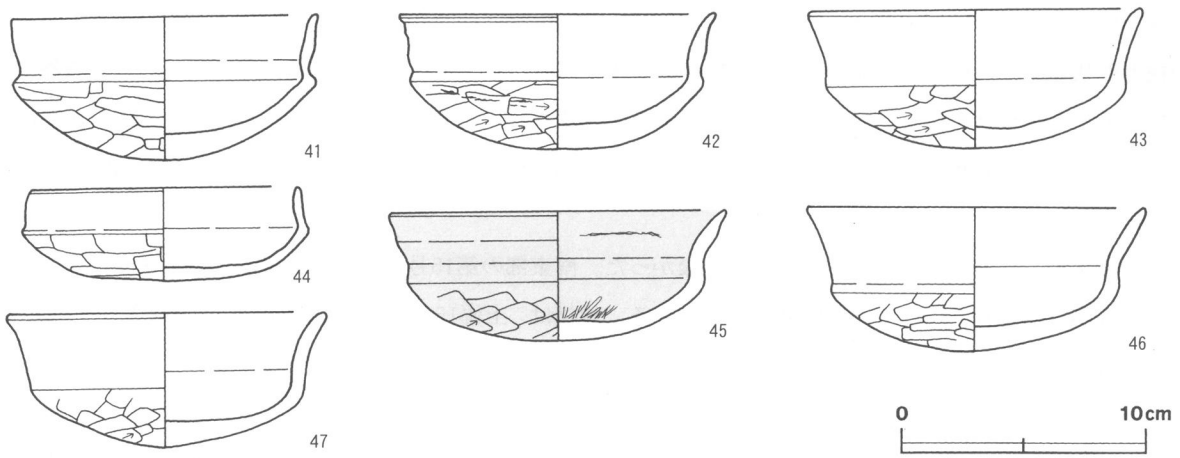
土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物少量
4　褐　　色　焼土粒子・炭化粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量



第11図　第13号住居跡実測図

遺物　土師器片31点が出土している。第12図41から47は土師器坏である。北壁際の北西コーナー部寄りから，41を下に44と46の順で，その東隣に42を下に45と47の順でそれぞれ３枚ずつ重ねられた状態で，43はさらにその東隣にいずれも正位で床面から出土している。

所見　床面の一部に赤変が認められること及び炭化物が多く残っていることから、焼失家屋と考えられる。また，時期は，出土土器から古墳時代後期（６世紀前葉）と考えられる。



第12図　第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表(第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
41	土師器	坏	12.6	5.8	－	長石･石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	床面	100%　PL6
42	土師器	坏	13.0	5.5	－	長石･石英	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	床面	100%　PL6
43	土師器	坏	13.8	5.6	－	雲母･長石･石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	床面	100%　PL6
44	土師器	坏	11.0	3.7	－	石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	床面	100%　PL7
45	土師器	坏	13.6	5.2	－	雲母･長石･石英	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ後放射状の磨き。	床面	100%　赤彩 PL7
46	土師器	坏	13.8	5.8	－	雲母･長石･石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	床面	100%　PL7
47	土師器	坏	13.0	5.5	－	雲母･長石･石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	床面	100%　PL7

第14号住居跡（第13～15図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２b9 区。

重複関係　第８号住居跡に北東コーナー部を，第１号井戸跡に竈右袖部付近を掘り込まれている。

規模と形状　南側が調査区域外になるため，正確な規模と形状は不明であるが，東西軸が6.46mであり，方形また長方形と推測される。主軸方向はN－13°－Wである。壁高は55～70cmで，全体にほぼ直立している。

床　ほぼ平坦である。確認される壁際を除いてほぼ全体的に踏み固められている。北壁の一部と東・西壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅11～21cm，下幅４～６cm，深さ５cmほどで，断面形はU字形をしている。

ピット　２か所。Ｐ１は，北東コーナー部付近に位置していること，またその規模から，主柱穴と考えられる。主柱穴の深さは66cmである。Ｐ２の性格は不明である。北コーナー部から貯蔵穴が確認された。平面形は隅丸方形で，規模は長軸74cm，短軸61cm，深さ45cmで，断面形は逆台形状である。

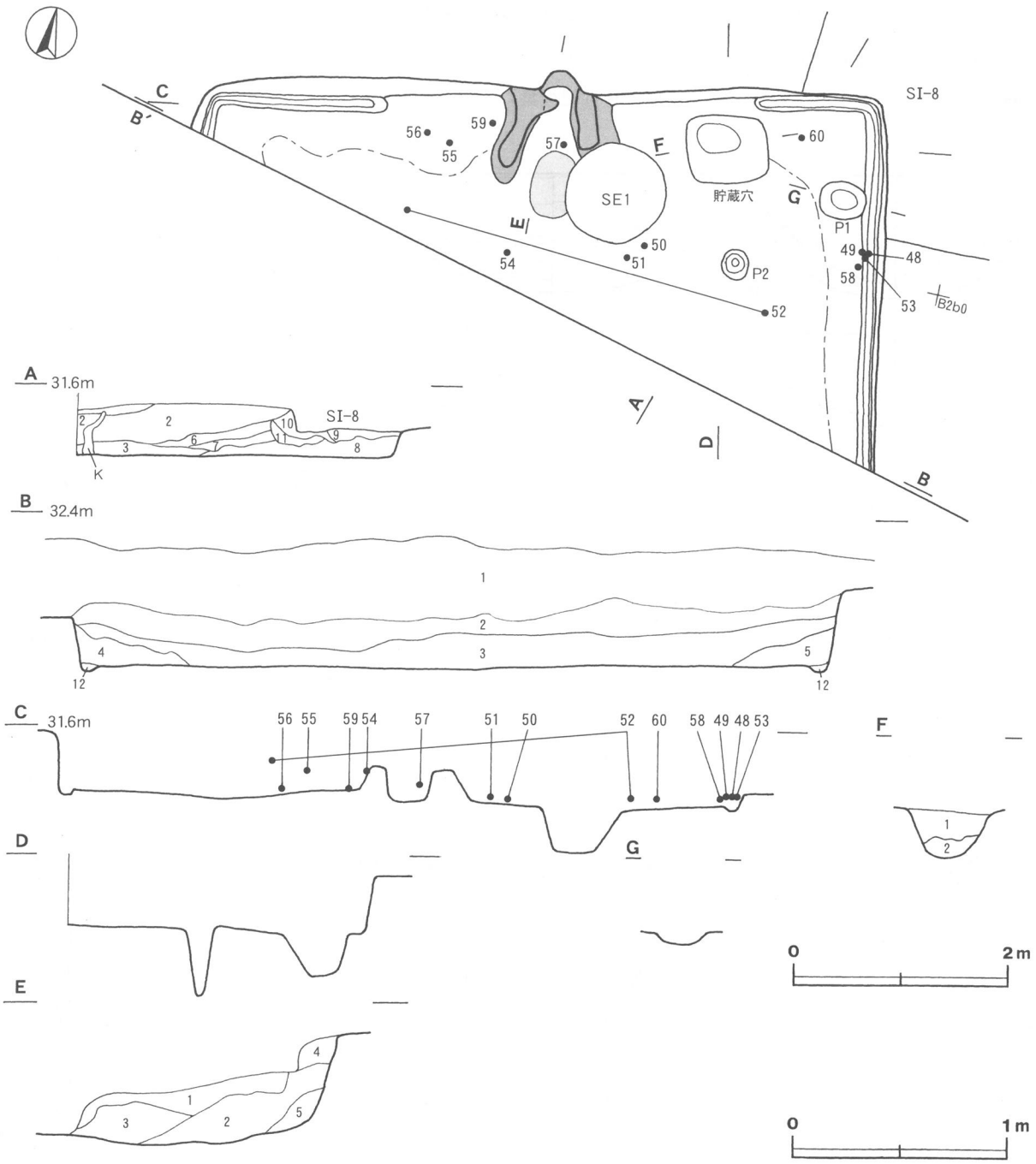
貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量　　2　暗褐色　ロームブロック中量

竈　北壁のほぼ中央部に付設されている。第１号井戸跡に右袖部の一部が壊されている。袖部は礫及び白色粒子を含む砂質粘土で構築されている。規模は，煙道部から焚口部まで140cm，最大幅が116cm，壁外への掘り込みは20cmである。火床面は床面を８cmほど掘りくぼめており，皿状をしている。袖部の内壁及び火床面は被熱を受けてよく赤変硬化している。煙道の平面形は逆U字形で，煙道は外傾している。

竈土層解説

1　灰 褐 色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子・礫微量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・砂質粘土粒子・礫微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量，砂質粘土粒子・礫少量
4　黒 褐 色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，礫微量
5　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・礫少量



第13図　第14号住居跡実測図

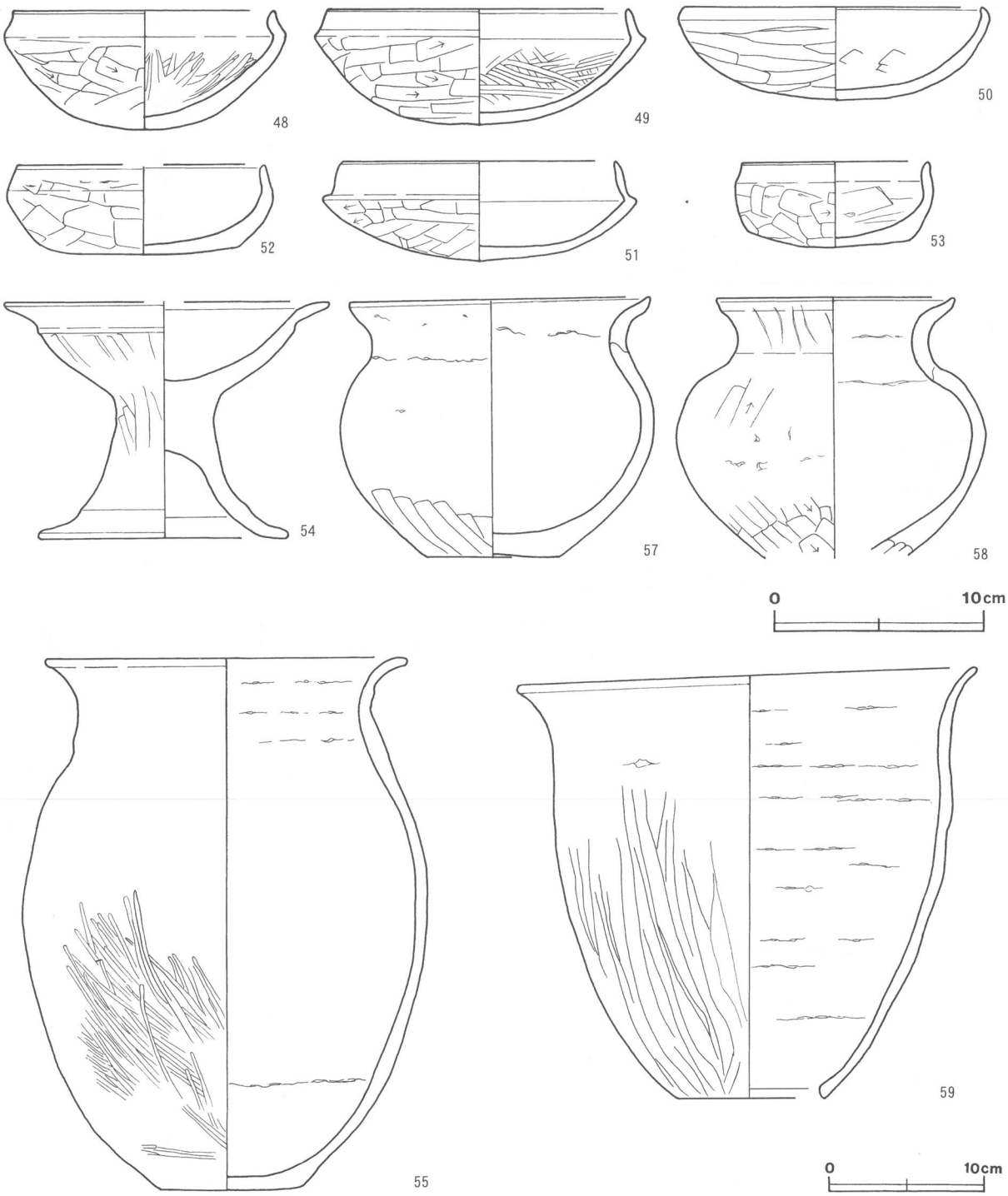
覆土　11層からなり，ロームブロックを多く含んでいることから人為堆積と思われる。第１層は表土である。

土層解説

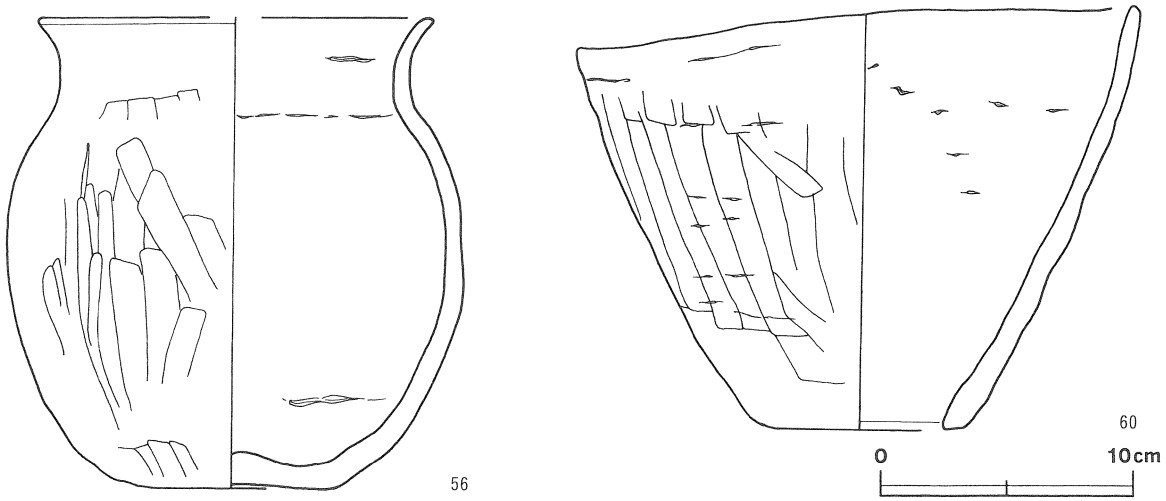
1　黒 褐 色　ロームブロック微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量
3　黒 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック微量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック微量
5　黒 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
6　暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土粒子微量
7　黒 褐 色　ロームブロック中量
8　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
9　褐　　色　ロームブロック多量
10　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
11　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
12　褐　　色　ロームブロック中量

遺物　土師器片211点が出土している。第14図48・49・53の土師器坏は重なった状態で，58の土師器甕とそれぞれ北東コーナー部寄りの東壁際，50・51の土師器坏は竈の右袖寄り，52の土師器坏は東壁寄りと竈の左袖寄り，54の土師器高坏は竈の左袖前，55の土師器壺と第15図56の土師器小形甕は北壁際の竈左袖寄り，60の土師器甑は北東コーナー部寄りの北壁際，59の土師器甑は北壁際の竈左袖わきのそれぞれ覆土下層から出土している。第14図57の土師器小形甕は竈の火床上から出土している。

所見　時期は，出土土器から古墳時代後期（６世紀後葉）と考えられる。



第14図　第14号住居跡出土遺物実測図（１）



第15図　第14号住居跡出土遺物実測図（２）

第14号住居跡出土遺物観察表（第14・15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	坏	12.6	5.6	—	雲母・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ後放射状の磨き。	覆土下層	100%　PL7
49	土師器	坏	14.3	5.5	—	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ後ヘラ磨き。	覆土下層	100%　PL7
50	土師器	坏	14.4	4.5	—	長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	覆土下層	100%　PL9
51	土師器	坏	13.2	4.8	—	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	覆土下層	80%　PL9
52	土師器	坏	[11.6]	4.3	8.6	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	覆土下層	60%　PL9
53	土師器	坏	8.9	4.1	7.7	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。	覆土下層	90%　PL9
54	土師器	高坏	[15.6]	11.3	11.9	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部及び裾部横ナデ，脚部ヘラ削り後ナデ。	覆土下層	60%　PL7
55	土師器	甕	22.6	34.2	8.7	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ磨き。	覆土下層	90%　PL7
56	土師器	甕	[15.5]	18.7	7.6	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り。	覆土下層	60%　PL8
57	土師器	甕	14.3	12.4	6.0	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面下端ヘラ削り。	覆土中層	90%　PL8
58	土師器	甕	11.3	(12.4)	—	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面下端ヘラ削り。	覆土下層	90%　PL8
59	土師器	甑	29.2	27.6	9.2	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り。	覆土中層	80%　PL8
60	土師器	甑	22.1	17.0	8.0	雲母・長石・石英	明褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラ削り。	覆土下層	90%　PL8

第16号住居跡（第16図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２a7区。

重複関係　第７号住居跡及び第12・13号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　第７号住居跡に北コーナー部を掘り込まれ，また，南側の大半が調査区域外になり，規模は不明である。北西壁の中央部に位置すると思われる竈の一部と北コーナー部の一部，及び東コーナー部から北東壁部分が確認され，東西軸が5.84mである。平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN－56°－Wである。壁高は30～35cmであり，外傾している。

床　平坦である。硬化面は特に認められなかった。

竈　北西壁のほぼ中央部に付設されていたと思われる。第７号住居跡に右袖部の一部が壊されており，左袖部の大半は調査区域外にかかっている。袖部は礫をやや多く含む砂質粘土で構築されている。確認できる規模は，右袖部の最大幅が42cm，壁外への掘り込みは27cmである。火床面は床面を６cmほど掘りくぼめており，皿状をしている。袖部の内壁及び火床面は被熱を受けてよく赤変硬化している。煙道の平面形は逆U字形で，煙道は緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1　にぶい褐色　ローム粒子・砂質粘土ブロック少量，焼土ブロック微量
2　極暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック少量，砂質粘土粒子微量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量
4　暗赤褐色　ローム粒子・砂質粘土ブロック少量，焼土ブロック微量

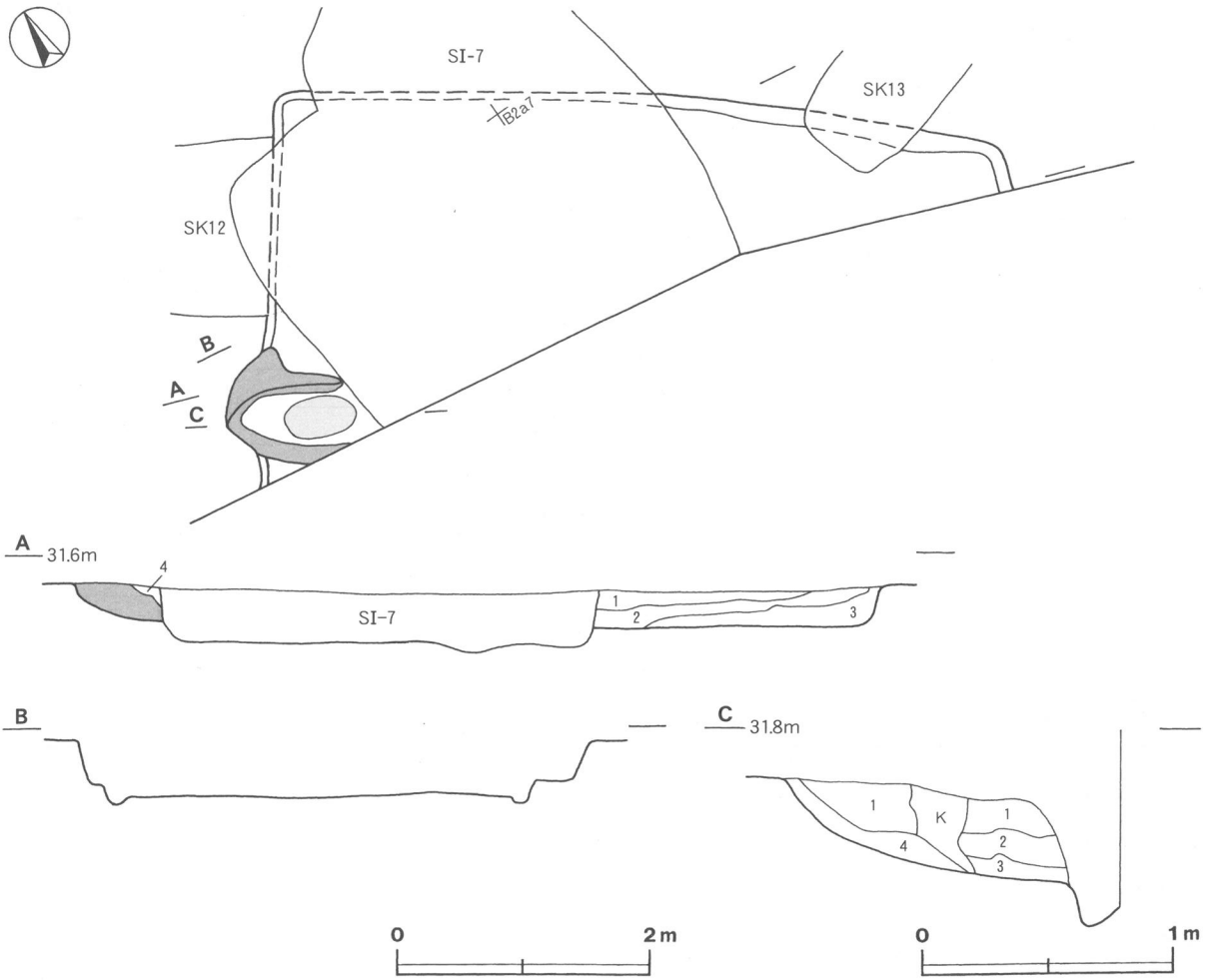
覆土　4層からなり，レンズ状の堆積状況から自然堆積と思われる。

土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量
3　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
4　灰 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量

遺物　土師器片13点が出土している。土師器は細片であり，図示できなかった。

所見　本跡は出土遺物が少なく正確な時期は不明であるが，出土した土師器片と，古墳時代後期と考えられる第1号住居跡と同じく北西竈で，主軸方向がほぼ同じであることなどから，時期は古墳時代と考えられる。



第16図　第16号住居跡実測図

表2　古墳時代住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向(長軸)	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設 主柱穴	内部施設 出入口	内部施設 ピット	内部施設 炉・竈	内部施設 貯蔵穴	覆土	出土遺物	時期	重複関係(旧→新)
1	A2i3	N-58°-E	方形	5.35 × 5.10	35～55	平坦	全周	4	—	4	1	1	人為	土師器・土製品	古墳時代後期	SI-2→本跡
11	B3b3	N-25°-E	不明	3.65 ×(1.36)	11～16	平坦	一部	—	—	—	—	—	人為	土師器・不明土製品	古墳時代後期	SK10→本跡→SI-10
13	B3d7	不明	不明	(1.85 × 1.25)	30～40	平坦	一部	—	—	1	—	—	人為	土師器	古墳時代後期	本跡→SI-15
14	B3b9	N-13°-W	〔方形〕	6.46 ×(3.42)	15～59	平坦	一部	1	—	1	1	1	人為	土師器	古墳時代後期	本跡→SI-8・SE1
16	B2a7	N-56°-W	〔長方形〕	5.84 ×(3.07)	30～35	平坦	—	—	—	—	1	—	自然	土師器	古墳時代	本跡→SK12→SK13・SI-7

３　奈良・平安時代の遺構と遺物

（１）　竪穴住居跡

今回の調査で，奈良・平安時代の竪穴住居跡８軒を確認した。以下，その特徴や遺物について記載する。

第４号住居跡（第17･18図）

位置　調査区の西部，Ａ２i5 区。

規模と形状　長軸5.55ｍ，短軸4.08ｍの長方形で，主軸方向はＮ－２°－Ｅである。壁高は27～36㎝で，全体に外傾している。

床　北西コーナー部から南東コーナー部にかけて帯状に撹乱を受けている。残存する床面はほぼ平坦であり，特に中央部から竈の左袖付近まで，また，貯蔵穴と張出部の間が踏み固められている。東壁中央部に長軸120㎝，短軸105㎝の長方形に地山を掘り残した突出部が確認された。その性格は不明である。各壁下及び張出部下に壁溝が巡っている。規模は，上幅12～36㎝，下幅５～20㎝，深さ８～14㎝で，断面形はＵ字形をしている。

ピット　２か所。Ｐ１及びＰ２の性格は不明である。北東コーナー部に貯蔵穴が確認された。平面形は楕円形で，規模は長径65㎝，短径57㎝，深さ26㎝である。

貯蔵穴土層解説

1	暗 褐 色	ロームブロック中量
2	褐　　色	ロームブロック中量

竈　北壁の中央部から西寄りに付設されている。袖部は焼土ブロックを含む砂質粘土で構築されている。規模は，煙道部から焚口部まで120㎝，最大幅が125㎝，壁外への掘り込みは30㎝である。火床面は床面とほぼ同じ高さである。袖部の内壁及び火床面は熱を受けて全体的に硬化し，わずかに赤変している。煙道の平面形は逆Ｕ字形で，外傾している。

竈土層解説

1	暗 褐 色	砂質粘土ブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2	暗 褐 色	砂質粘土ブロック多量，焼土粒子微量
3	にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック多量，焼土粒子少量，ロームブロック微量
4	暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子中量，炭化物少量
5	暗赤褐色	焼土ブロック中量
6	灰 褐 色	ローム粒子少量，砂質粘土ブロック･焼土ブロック･炭化粒子微量
7	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子多量，ロームブロック微量
8	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子多量，焼土粒子微量
9	暗 褐 色	焼土粒子少量，砂質粘土ブロック微量
10	暗 褐 色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量，焼土ブロック微量
11	赤 褐 色	焼土ブロック中量，ロームブロック少量

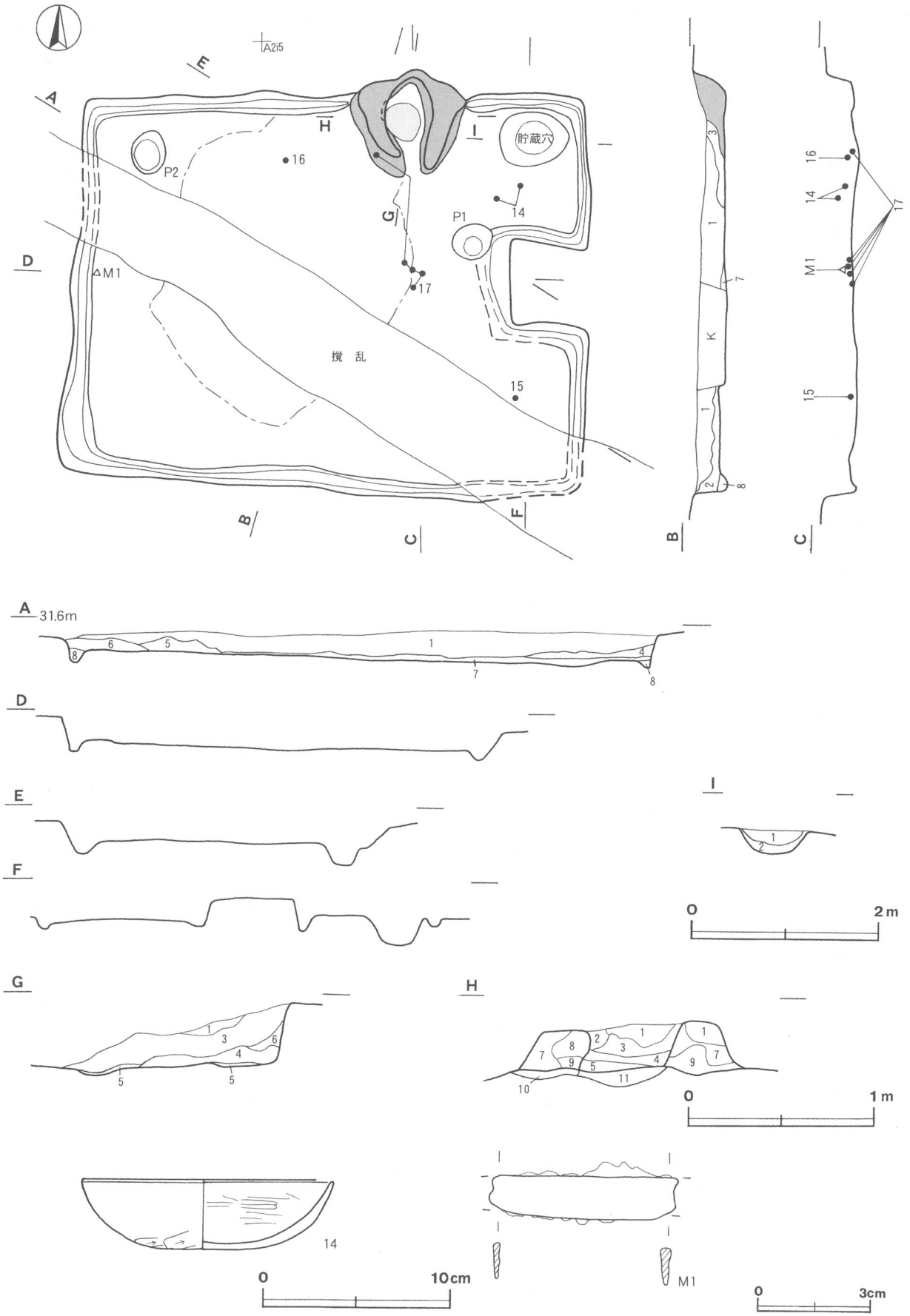
覆土　８層からなる。ロームブロックを多く含んでおり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

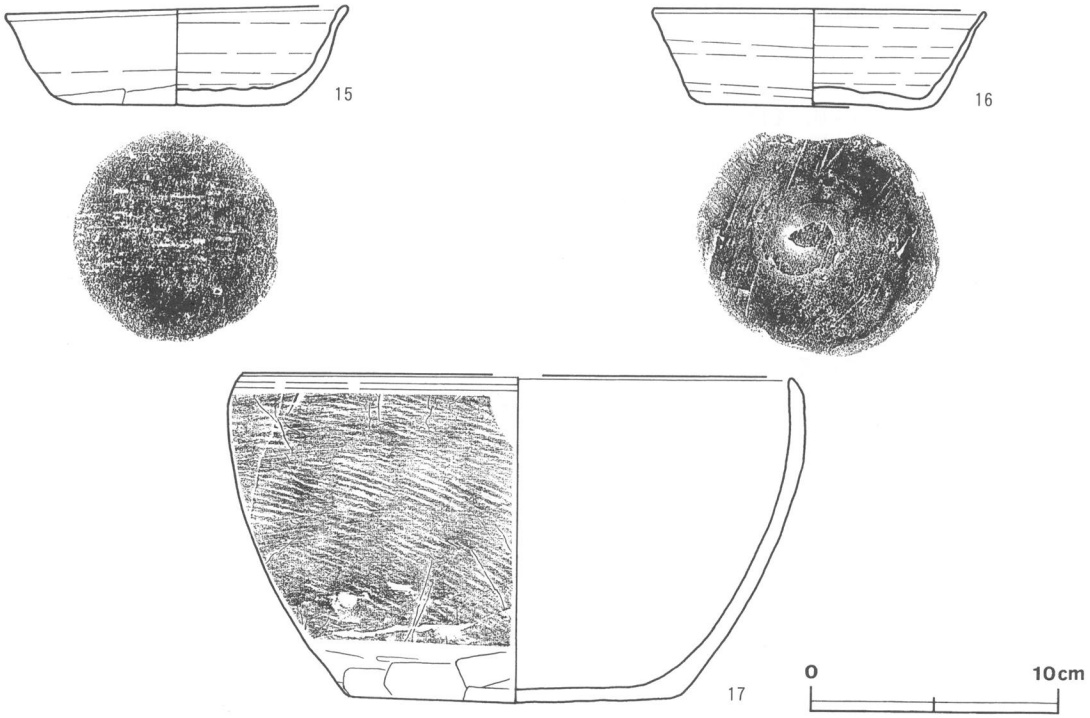
1	黒 褐 色	ロームブロック少量
2	暗 褐 色	ロームブロック多量
3	暗 褐 色	粘土ブロック中量，ロームブロック少量
4	褐　　色	ロームブロック少量
5	黒 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量
6	暗 褐 色	ロームブロック少量・粘土ブロック微量
7	褐　　色	ロームブロック多量
8	極暗褐色	ロームブロック微量

遺物　土師器片85点，鉄製品（刀子）１点が出土している。第18図15の須恵器坏は南東コーナー部付近，16の須恵器坏は竈左袖わきの北壁寄り，17の須恵器鉢は中央部から東壁寄りのそれぞれ覆土下層から出土している。第17図14の土師器坏は北東コーナー部付近の覆土中層から出土している。Ｍ１の刀子は西壁際の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から奈良時代（８世紀中葉）と考えられる。



第17図　第４号住居跡・出土遺物実測図



第18図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表（第17・18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	坏	13.4	3.7	4.9	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ磨き。	覆土中層	80%　PL9
15	須恵器	坏	13.7	4.1	8.2	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部一方向のヘラ削り。	覆土下層	70%　PL9
16	須恵器	坏	13.4	4.0	8.9	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り。	覆土下層	60%　PL9
17	須恵器	鉢	[22.4]	13.3	13.4	雲母・長石	暗灰黄	普通	体部外面横位の平行叩き，下端ヘラ削り。	覆土下層	50%　PL9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀子	(5.1)	1.7	0.3	(3.6)	鉄	刃部・茎尻欠損。	覆土下層	PL12

第５号住居跡（第19図）

位置　調査区の西部，Ａ２j7区。

重複関係　第20号土坑及び第２・３号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　北側の大半が調査区域外になっているため，北西コーナー部から南壁までが確認されている。規模及び主軸方向は不明である。北西コーナー部がほぼ直角になることから，平面形は長方形または方形と推測される。確認された壁高は43～57cmで，外傾している。

床　ほぼ平坦である。確認された壁際を除いて踏み固められている。壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅20～26cm，下幅５～14cm，深さ12～16cmで，断面形はU字形をしている。

ピット　１か所。Ｐ１は，コーナー部に位置していることから主柱穴の可能性が考えられる。主柱穴の深さは35cmである。

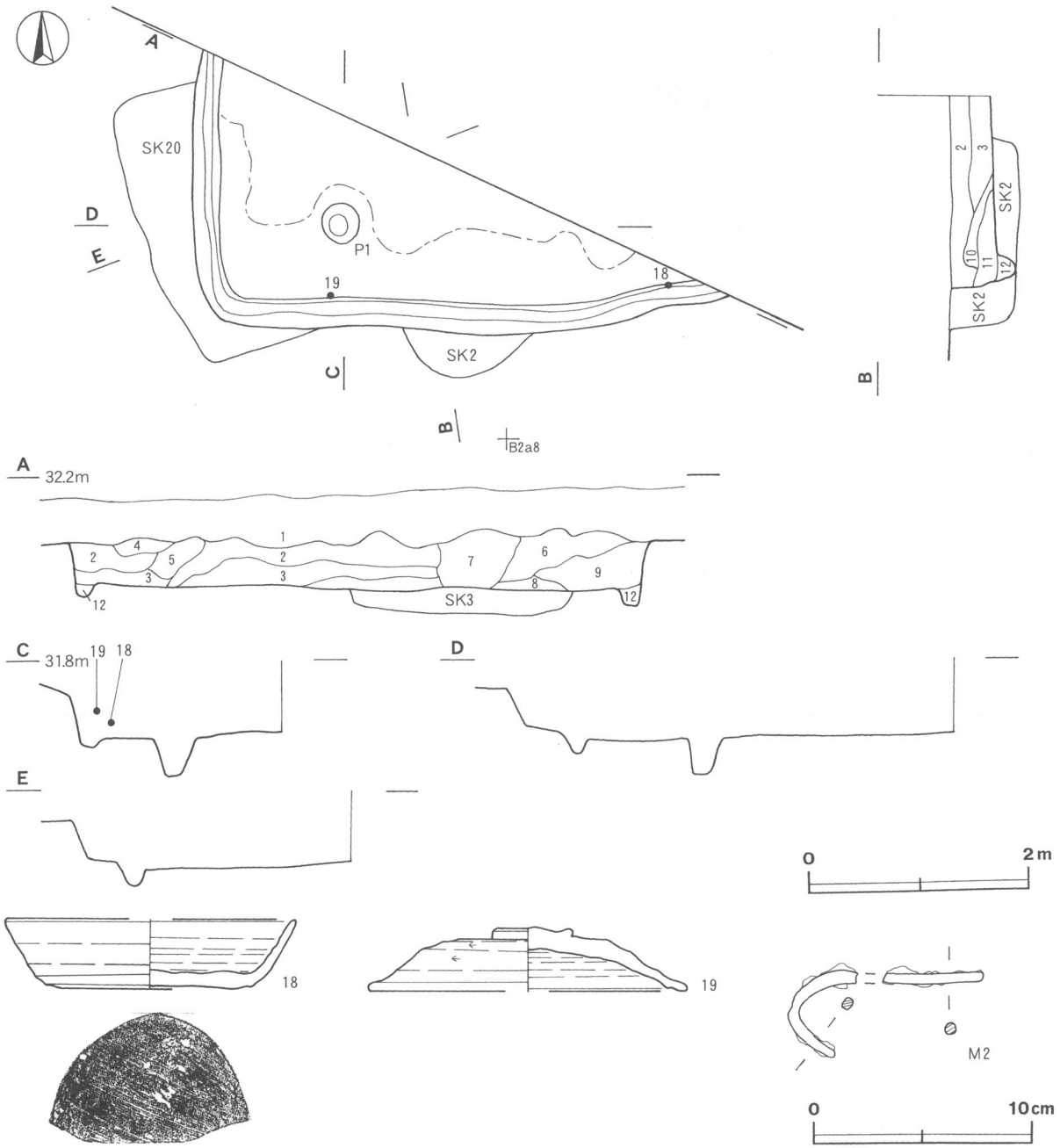
覆土　11層からなり，不規則な堆積状況であることから人為堆積と思われる。第１層は表土である。

土層解説

1　黒 褐 色　礫少量，ロームブロック・焼土粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
4　暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土粒子微量
5　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
6　極暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
7　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子少量
8　暗 褐 色　焼土粒子少量，ロームブロック・炭化物微量
9　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
10　黒 褐 色　焼土粒子少量，ロームブロック微量
11　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
12　褐　　色　ロームブロック中量

遺物　土師器片393点，須恵器片344点，鉄製品（不明鉄製品）２点が出土している。第19図18の須恵器坏は南壁際の覆土下層から出土している。19の須恵器蓋は南西コーナー部寄りの南壁際の覆土中層から出土している。Ｍ２は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から奈良時代（８世紀前葉）と考えられる。



第19図　第５号住居跡・出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	須恵器	坏	[13.2]	3.2	[7.6]	雲母・長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部一方向のヘラ削り。	覆土下層	30% PL9
19	須恵器	蓋	[14.5]	2.9	—	雲母・長石・石英	灰	普通	天井部右回りの回転ヘラ削り。	覆土中層	40% PL9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	不明鉄製品	(9.0)	(3.8)	0.5	(11.5)	鉄	断面方形。	覆土中	

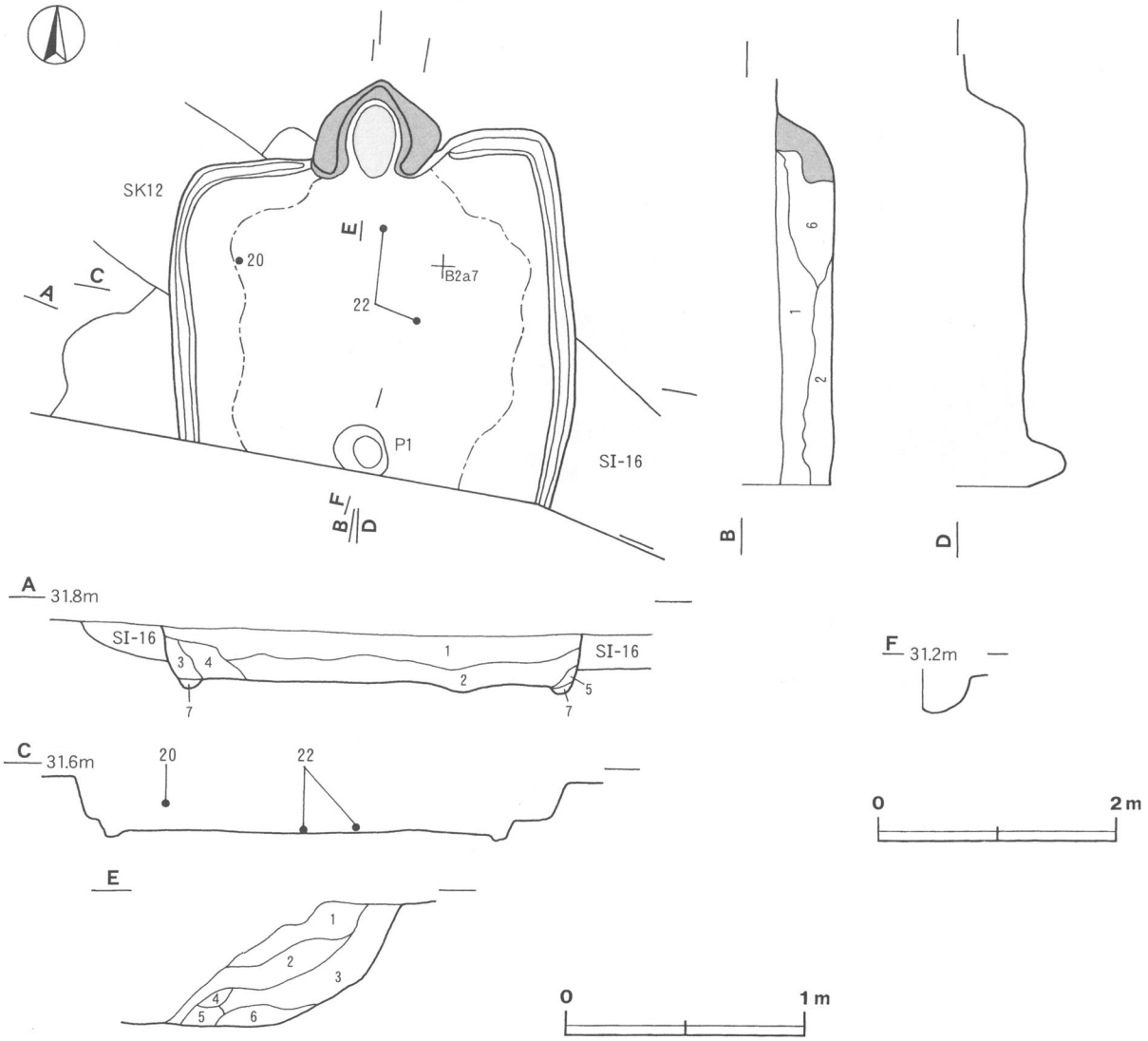
第７号住居跡（第20・21図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２a6区。

重複関係　第16号住居跡及び第12号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　南壁が調査区域外になるが，方形と推定される。東西軸が3.35m，確認される南北軸が3.21mであり，主軸方向はN－4°－Wである。壁高は49～53cmで，全体に外傾している。

床　ほぼ平坦である。壁際を除いて特に中央部が踏み固められている。確認された各壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅15～22cm，下幅５～９cm，深さ６～８cmで，断面形はU字形をしている。



第20図　第７号住居跡実測図

ピット　1か所。P1は，竈に相対しており，また，推定される南壁寄りに位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。深さは33cmである。

竈　北壁のほぼ中央部に付設されている。袖部は白色粒子を含むざらざらとした砂質粘土で構築されている。規模は，煙道部から焚口部まで96cm，最大幅が106cm，壁外への掘り込みは53cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さであり，火床面の中心が北壁線上よりも外側になっている。袖部の内壁及び火床面は熱を受けて赤変しているが，硬化したところは認められない。煙道の平面形は逆U字形で，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗褐色　砂質粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土ブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　暗褐色　ロームブロック・砂質粘土ブロック微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量
5　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
6　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック少量

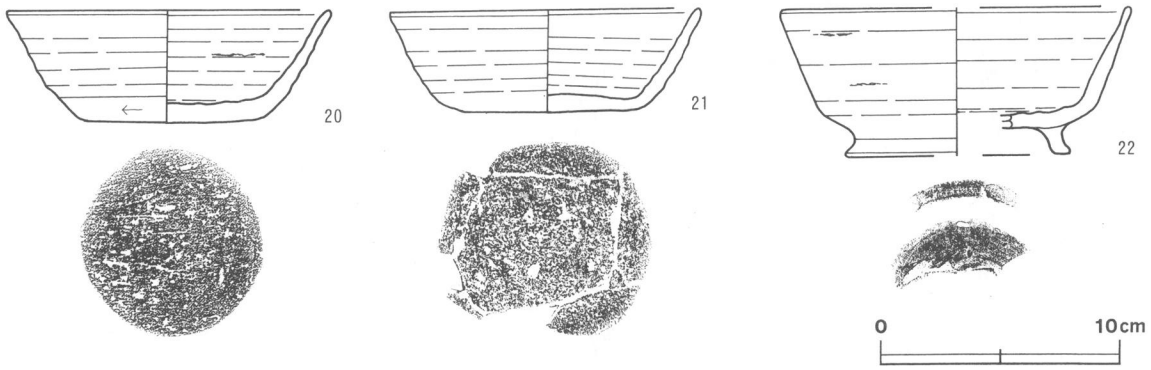
覆土　7層からなり，ロームブロックを比較的多く含んでいることから人為堆積と思われる。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
3　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量
4　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
6　黒褐色　ロームブロック中量，粘土ブロック少量，焼土ブロック微量
7　暗褐色　ロームブロック多量

遺物　土師器片121点，須恵器片69点が出土している。第21図22の須恵器高台付坏は，中央部及び竈手前の床面から出土している。20の須恵器坏は，西壁寄りの覆土中層から出土している。21の須恵器坏は，竈の覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から奈良時代（8世紀後葉）と考えられる。



第21図　第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
20	須恵器	坏	13.5	4.6	7.4	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，底部一方向のヘラ削り。	覆土中層	100%　PL10
21	須恵器	坏	12.9	4.3	7.2	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部下端ヘラ削り，底部ヘラ切り後一方向のヘラ削り。	竈覆土中	80%　PL10
22	須恵器	高台付坏	[14.7]	6.1	[9.4]	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ削り後，高台部貼り付け。	床面	50%　PL10

第8号住居跡（第22・23図）

位置　調査区の中央部，B2a9区。

重複関係　第14号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸3.05m，短軸2.93mの方形で，主軸方向はN－1°－Eである。壁高は18～21cmで，全体に外傾している。

床　ほぼ平坦である。出入り口施設に関するピットの付近及び中央部から竈の手前までが踏み固められている。各壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅８～24cm，下幅５～14cm，深さ５～８cmで，断面形はU字形をしている。

ピット　１か所。Ｐ１は，竈に相対して，南壁下の中央に位置していることから出入り口施設に関するピットと考えられる。深さは14cmである。

竈　北壁の中央部に付設されている。袖部は白色粒子を含む砂質粘土で構築されている。規模は，煙道部から焚口部まで110cm，最大幅が110cm，壁外への掘り込みは58cmである。火床面は床面を10cmほど掘りくぼめており，皿状をしている。火床面の中心はほぼ北壁線上に位置している。袖部の内壁及び火床面は熱を受けて赤変しており，その一部が硬化している。煙道の平面形は逆U字形で，立ち上がりは緩やかである。

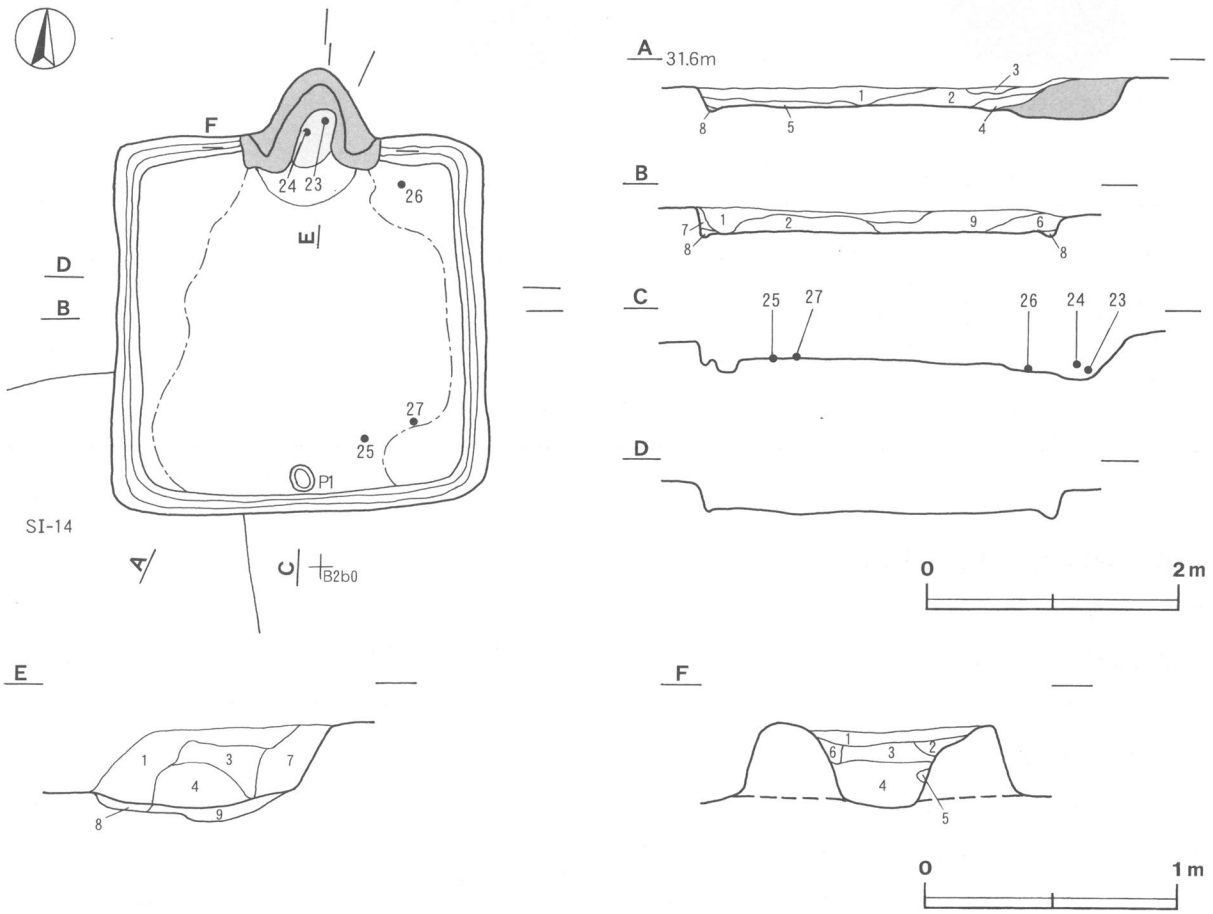
竈土層解説

1　黒褐色　ロームブロック微量
2　暗褐色　ロームブロック微量
3　暗褐色　焼土ブロック中量，砂質粘土ブロック少量，ロームブロック微量
4　にぶい黄褐色　砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量
5　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
6　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック少量
7　暗褐色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
8　灰褐色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子少量
9　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量

覆土　９層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

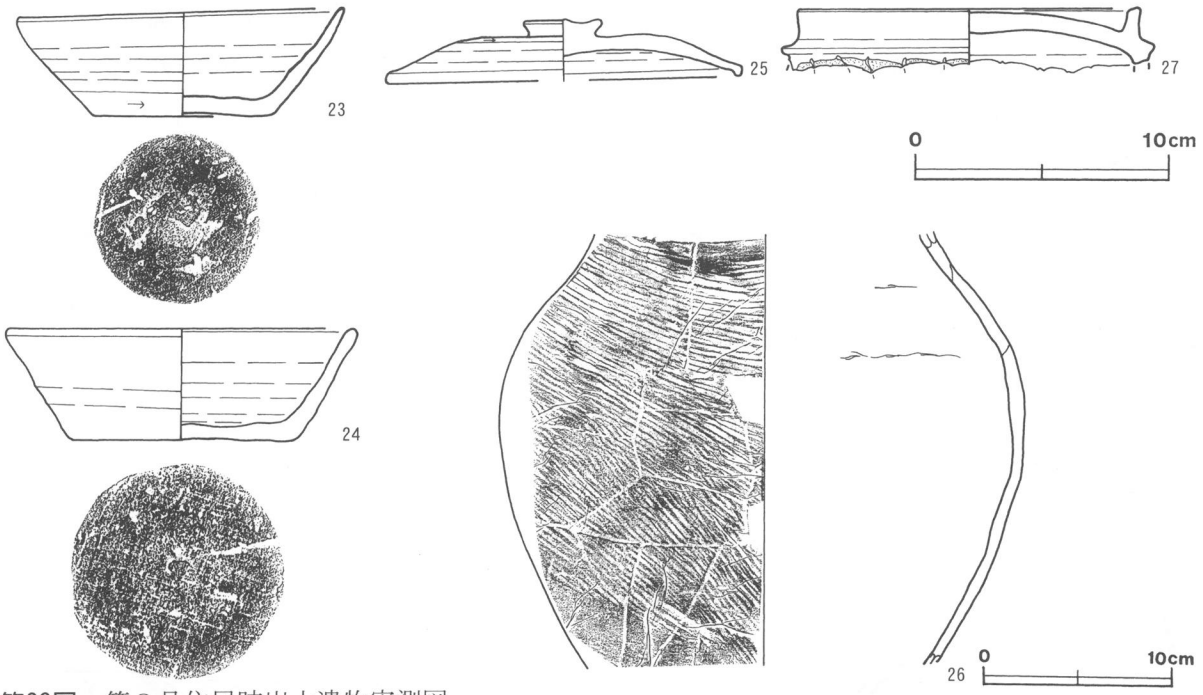
1　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック微量
2　暗褐色　ロームブロック微量
3　にぶい褐色　粘土ブロック中量，ローム粒子少量
4　黒褐色　ロームブロック少量
5　黒褐色　ロームブロック少量
6　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック微量
7　黒褐色　ローム粒子少量
8　褐色　ローム粒子中量
9　暗褐色　ローム粒子中量



第22図　第８号住居跡実測図

遺物　土師器片55点，須恵器片75点が出土している。第23図25 須恵器蓋及び27の須恵器円面硯は南東コーナー部付近，26の須恵器甕は北東コーナー部付近のいずれも床面から出土している。23及び24の須恵器坏は，竈の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から奈良時代（８世紀後葉）と考えられる。



第23図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
23	須恵器	坏	12.9	4.3	7.0	雲母・石英	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り，底部回転ヘラ切り後ナデ。	覆土下層	100%　PL10
24	須恵器	坏	13.9	4.4	8.6	長石・石英	褐灰	普通	体部下端回転ヘラ削り，底部一方向のヘラ削り。	覆土下層	90%　PL10
25	須恵器	蓋	[14.0]	2.4	－	長石・石英	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り。	床面	40%　PL10
26	須恵器	甕	－	(22.8)	－	雲母・長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	体部外面平行叩き。	床面	20%
27	須恵器	円面硯	[13.2]	(2.2)	－	長石・石英	褐灰	良好	海部外周に隆帯貼り付け，脚台部に凹線施文。	床面	10%　PL11

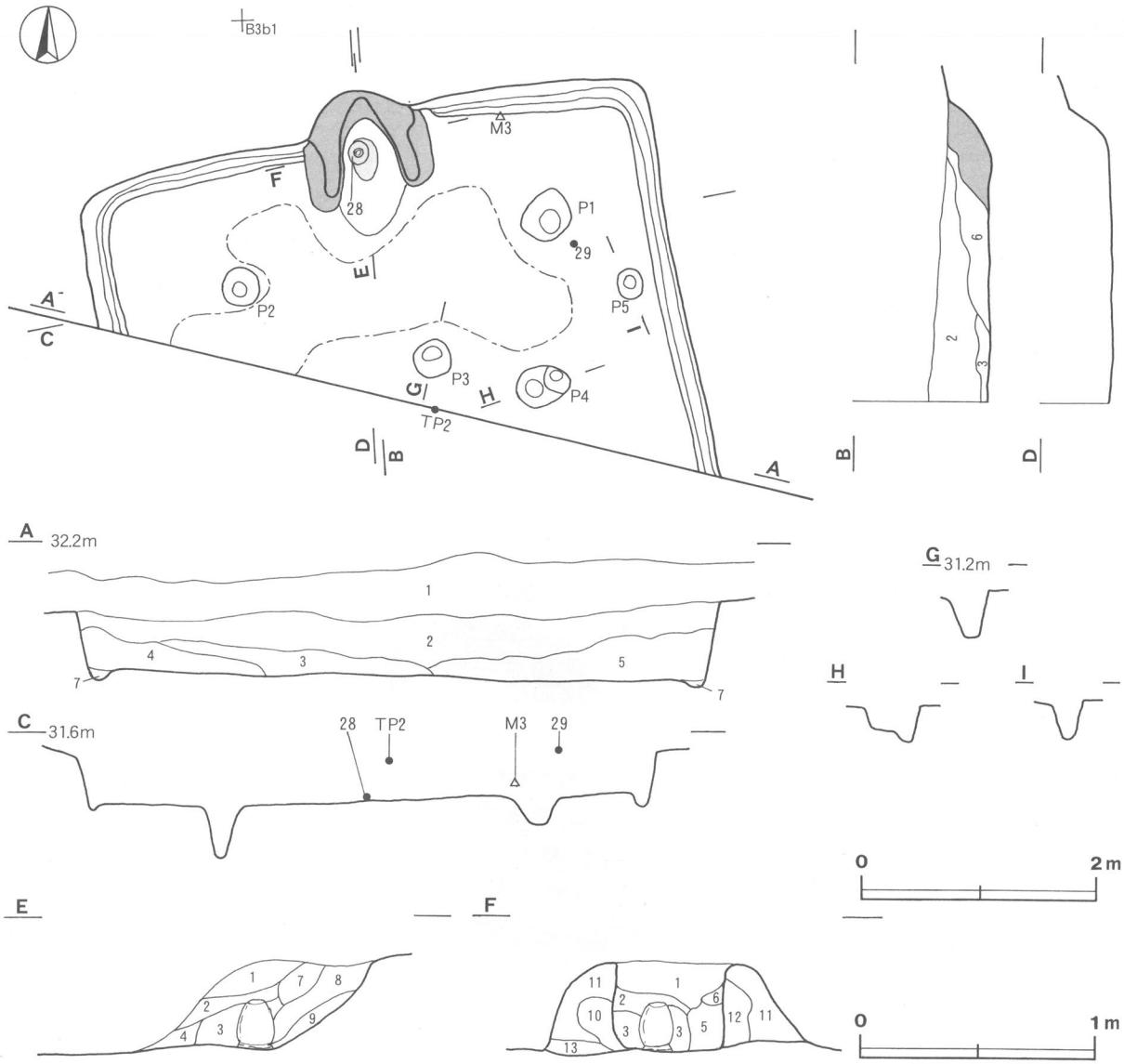
第９号住居跡（第24・25図）

位置　調査区の中央部，Ｂ３b1 区。

規模と形状　南側が調査区域外になっているため正確な規模と平面形は不明であるが，東西軸は4.94m，確認された南北軸は3.35mであり，方形または長方形と推定される。主軸方向はＮ－７°－Ｗである。壁高は42～45cmで，全体に外傾している。

床　ほぼ平坦である。特に中央部が踏み固められている。確認された壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅15～27cm，下幅５～11cm，深さ７～12cmで，断面形はＵ字形をしている。

ピット　５か所。Ｐ１・Ｐ２は，コーナー部付近に位置し，互いに結んだ線が対応する北壁とほぼ平行になることから主柱穴と考えられる。主柱穴の深さは24cm及び45cmである。Ｐ３～Ｐ５の性格は不明である。



第24図　第９号住居跡実測図

竈　北壁のほぼ中央部に付設されている。袖部は白色粒子及びわずかな礫を含む砂質粘土で構築されている。規模は，煙道部から焚口部まで126cm，最大幅が110cm，壁外への掘り込みは32cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さであり，北壁線上の内側にある。火床面に熱を受けた土師器小形甕が逆位で据えられたように出土しており，支脚として使用されたものと考えられる。熱を受けて袖部の内壁は硬化しており，火床面はわずかに赤変しているが，硬化したところは認められない。煙道の平面形は逆U字形で，立ち上がりは緩やかである。

竈土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子・砂質粘土粒子少量，ロームブロック微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
6　にぶい橙色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック微量
7　灰 褐 色　焼土粒子・砂質粘土ブロック少量，ローム粒子微量
8　黒 褐 色　焼土粒子・砂質粘土粒子少量，ロームブロック微量
9　黒 褐 色　焼土ブロック少量，ロームブロック・砂質粘土ブロック微量
10　にぶい橙色　砂質粘土粒子多量，焼土ブロック中量
11　浅 黄 色　砂質粘土粒子多量，焼土ブロック微量
12　にぶい橙色　砂質粘土粒子多量，焼土粒子中量
13　黒 褐 色　ロームブロック中量

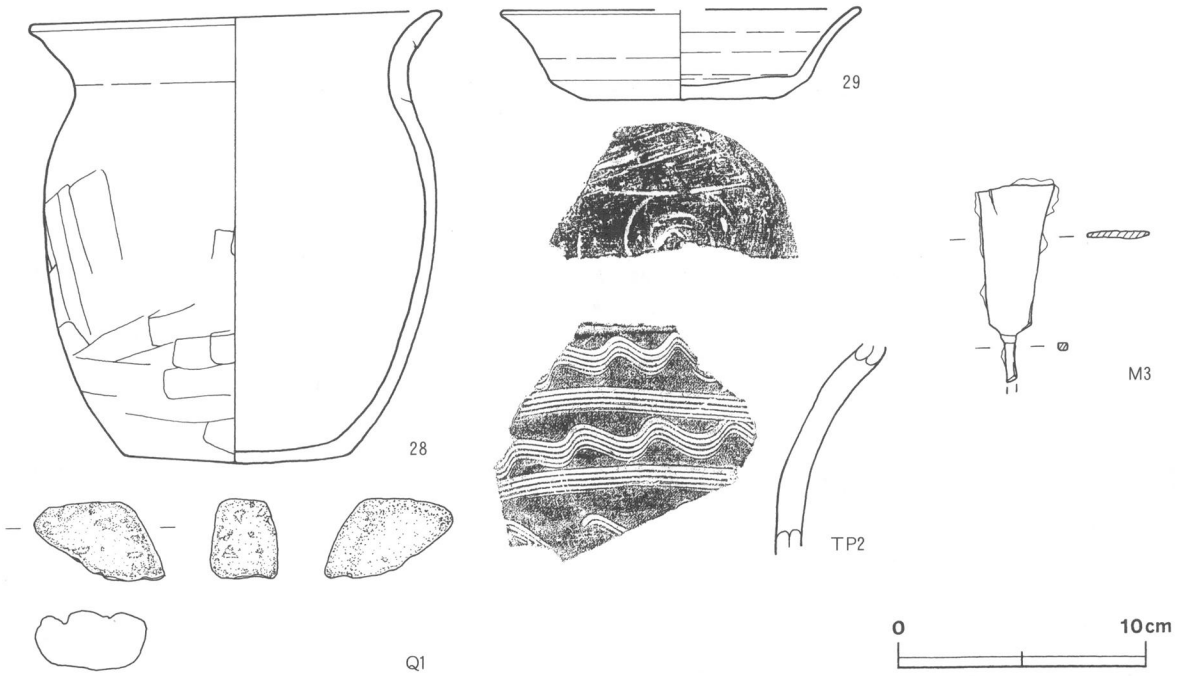
覆土　６層からなり，レンズ状の堆積状況から自然堆積と思われる。第１層は表土である。

土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック少量
5　褐　　色　ロームブロック中量
6　暗 褐 色　ロームブロック中量
7　褐　　色　ロームブロック中量

遺物　土師器片119点，須恵器片55点，鉄製品（鉄鏃）１点，石製品（軽石）１点が出土している。第25図28の土師器小形甕は，火床面から逆位で出土しており支脚に転用されたものと考えられる。29の須恵器坏は東壁寄り，ＴＰ２の須恵器甕口縁部は中央部のそれぞれ覆土上層から出土している。Ｍ３の刀子は竈右袖寄りの北壁際の覆土下層から，Ｑ１の軽石は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から奈良時代（８世紀中葉）と考えられる。



第25図　第９号住居跡出土遺物実測図

第９号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	土師器	小形甕	16.7	18.4	9.2	雲母･長石･石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部中位に斜位，下端に横位のヘラ削り後ナデ。	火床面	90%　PL10
29	須恵器	坏	[14.4]	3.6	[7.8]	雲母･長石･石英	黄灰	普通	体部下端ヘラ削り，底部回転ヘラ切り後ヘラ削り。	覆土上層	40%　PL11
TP2	須恵器	甕	—	(9.4)	—	雲母･長石	褐灰	普通	外面櫛描波条文。	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	鏃	(8.0)	3.3	0.3	(24.0)	鉄	方頭鏃。	覆土下層	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	不明石製品	5.4	3.2	2.4	9.9	軽石	平坦面３面，砥石カ。	覆土中	PL12

第10号住居跡（第26・27図）

位置　調査区の東部，Ｂ３b2 区。

重複関係　第11号住居跡・第10号土坑を掘り込み，第５・14号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.00m，短軸2.85mの方形で，主軸方向はＮ－90°－Ｅである。壁高は28～32cmで，全体に外傾している。

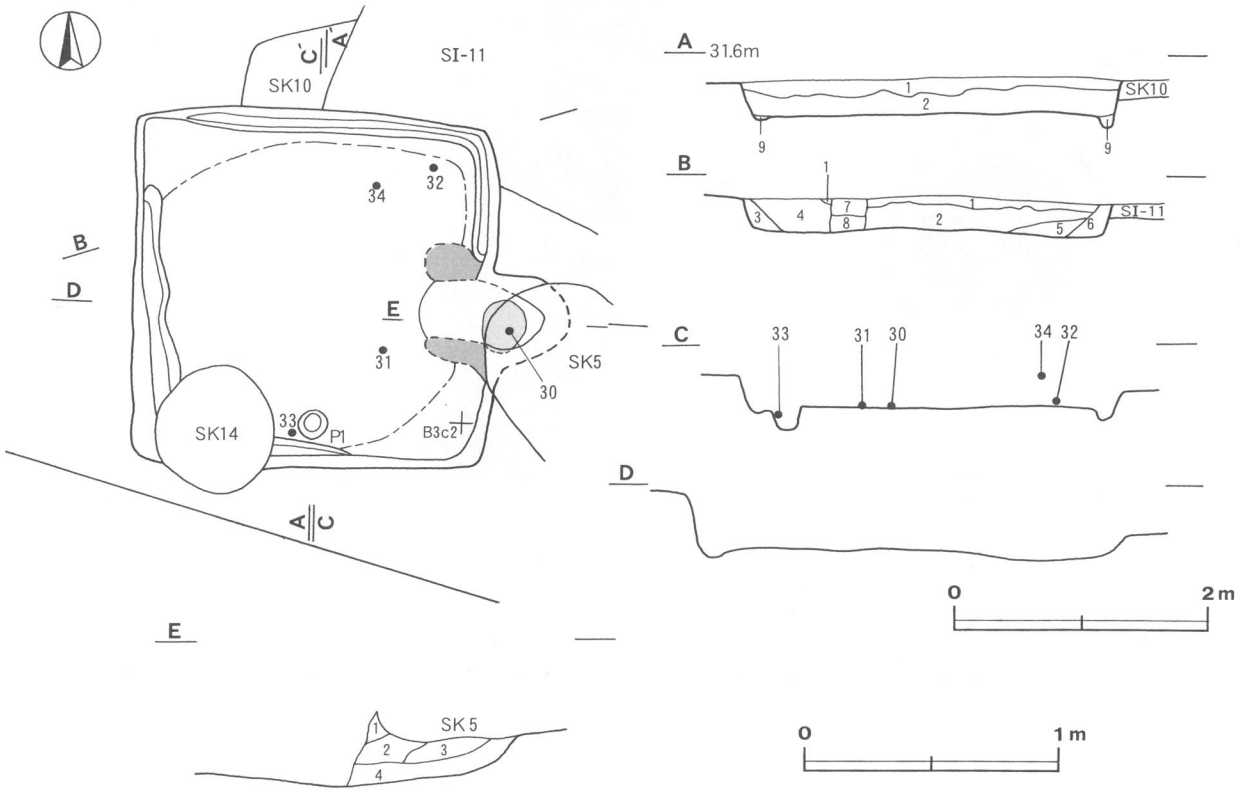
床　ほぼ平坦である。北東・北西・南東コーナー部を除いて中央部が踏み固められている。北西・南東コーナー部を除いた各壁下に壁溝が巡っている。規模は，上幅15～22cm，下幅５～８cm，深さ４～10cmで，断面形はＵ字形をしている。

ピット　１か所。Ｐ１の性格は不明である。

竈　東壁のほぼ中央部に付設されている。木根により両袖部が，第５号土坑により煙道部の上部が壊されており，煙道部の下部と火床部及び両袖部下部の粘土がわずかに残るのみである。規模は，煙道部から焚口部まで118cm，最大幅が100cm，壁外への掘り込みは68cmと推定される。火床面は床面を６cmほど掘りくぼめ，皿状をしており，熱を受けて赤変し一部が硬化している。煙道の平面形は逆Ｕ字形で，立ち上がりは緩やかであると推測される。

竈土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　砂質粘土粒子少量，ロームブロック微量
3　にぶい褐色　砂質粘土粒子多量，焼土粒子少量，ロームブロック微量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック少量



第26図　第10号住居跡実測図

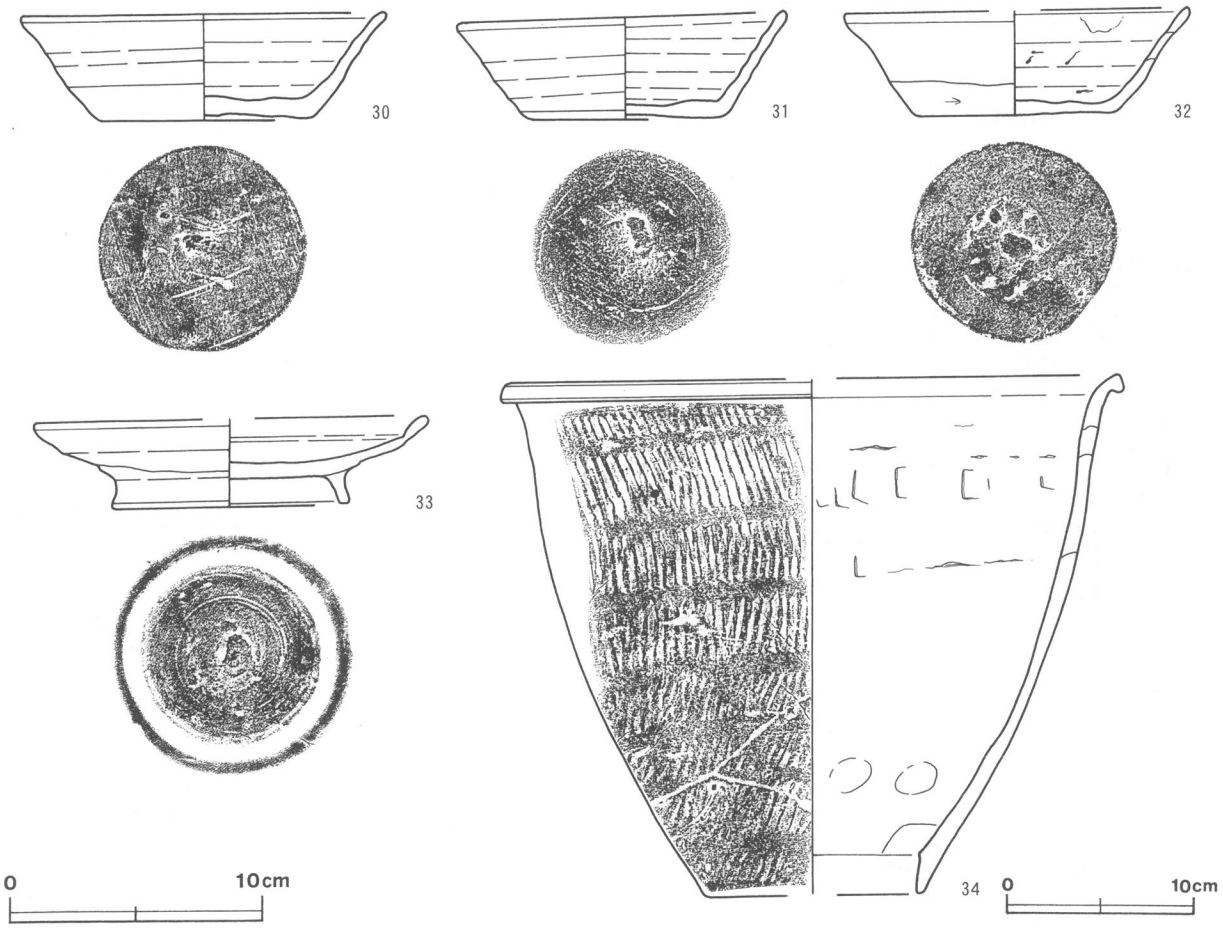
覆土　9層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック中量
3　黒褐色　ロームブロック微量
4　暗褐色　ロームブロック少量
5　黒褐色　ロームブロック少量
6　暗褐色　ロームブロック多量
7　暗褐色　ロームブロック少量
8　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
9　暗褐色　ロームブロック少量

遺物　須恵器片69点が出土している。第27図31の須恵器坏は，中央部から南東コーナー部寄りの床面から出土している。32の須恵器坏は北東コーナー部，33の須恵器高台付坏は南壁際，30の須恵器坏は竈のそれぞれ覆土下層から出土している。34の須恵器甑は中央部から北東コーナー部寄りの覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から奈良時代（8世紀後葉）と考えられる。



第27図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
30	須恵器	坏	14.5	4.2	8.3	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り，底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り。	竈覆土下層	95%　PL11
31	須恵器	坏	12.9	4.2	7.7	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部下端回転ヘラ削り，底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り。	床面	90%　PL11
32	須恵器	坏	[13.4]	4.2	7.6	長石・石英	褐灰	普通	体部下端ヘラ削り，底部回転ヘラ切り後ナデ。	覆土下層	70%　PL11
33	須恵器	高台付坏	[15.5]	3.5	9.3	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け。	覆土下層	60%　PL11
34	須恵器	甑	[32.0]	27.5	[11.3]	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部外面縦位の平行叩き。	覆土上層	30%

第15号住居跡（第28図）

位置　調査区の東部，Ｂ３d8 区。

重複関係　第 13 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　大部分が調査区域外になっており，南西コーナー部のみが確認された。確認された南壁は1.60m，西壁は1.04mで，平面形はコーナー部がほぼ直角になることから方形または長方形になるものと思われる。主軸方向は不明である。壁高は55cm ほどで，直立している。

床　平坦である。壁際を除いた部分が踏み固められている。壁下に壁溝が確認された。規模は，上幅15～21cm，下幅５～11cm，深さ６cm ほどで，断面形はU字形をしている。

ピット　１か所。Ｐ１の性格は不明である。

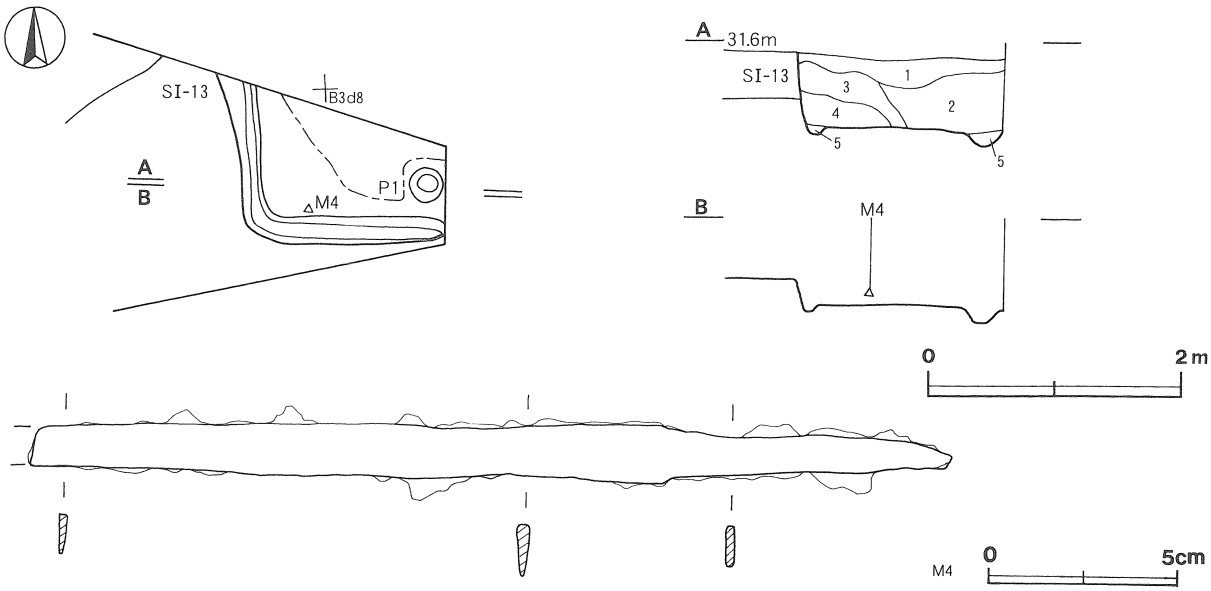
覆土　５層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
2　暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量
3　暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4　暗 褐 色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
5　暗 褐 色　ロームブロック中量

遺物　土師器片13点，須恵器片２点，鉄製品（刀子）１点が出土している。土師器及び須恵器は細片であり，図示できなかった。第28図Ｍ４は，南西コーナー部の南壁際の覆土下層から出土している。

所見　出土土器が細片であり，正確な時期は不明であるが，土師器片や須恵器片などから奈良・平安時代の可能性が考えられる。



第28図　第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M4	刀子	(24.3)	1.7	0.3	(44.2)	鉄	刃部一部欠損。	覆土下層	PL12

第17号住居跡（第29・30図）

位置　調査区の東部，Ｂ２a5 区。

規模と形状　大半が調査区域外になっているため，正確な規模は不明である。確認された北壁は3.07m，東壁は1.89mであり，平面形はコーナー部が直角になることから方形または長方形と推定される。主軸方向はN－15°－Wである。壁高は34cmほどで，外傾している。

床　平坦である。コーナー部および壁際を除いて踏み固められている。北壁及び東壁壁下の一部に壁溝が確認された。規模は，上幅10～14cm，下幅５cmほど，深さ７cmほどで，断面形はU字形をしている。

竈　北壁に付設されている。木根により左袖部の一部が壊されている。袖部は白色粒子を含むざらざらとした感じの砂質粘土で構築されている。規模は，煙道部から焚口部まで87cm，最大幅が74cm，壁外への掘り込みは37cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さであり，北壁線上の内側に位置している。袖部の内壁及び火床面は熱を受けてよく赤変硬化している。煙道の平面形は逆二等辺三角形で，外傾している。

竈土層解説

1　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　極暗褐色　焼土ブロック・砂質粘土粒子少量
3　黒 褐 色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子微量
4　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック少量

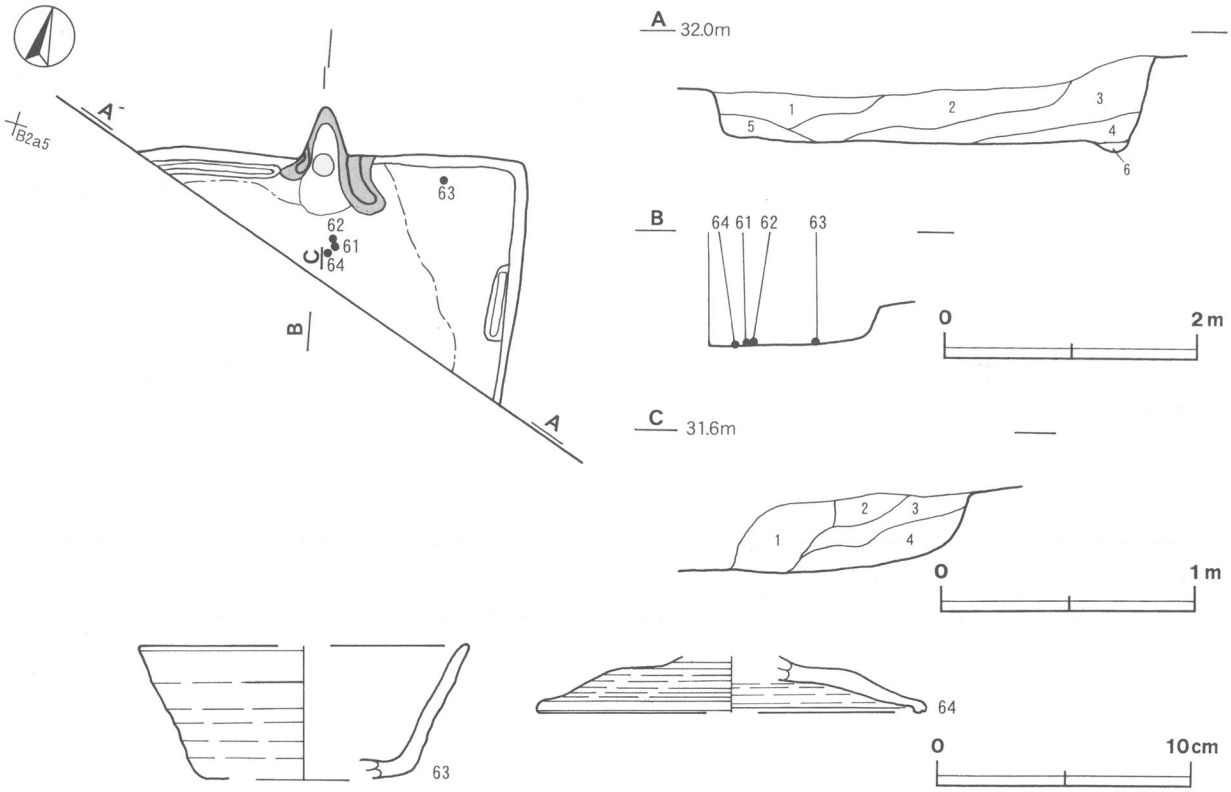
覆土　６層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

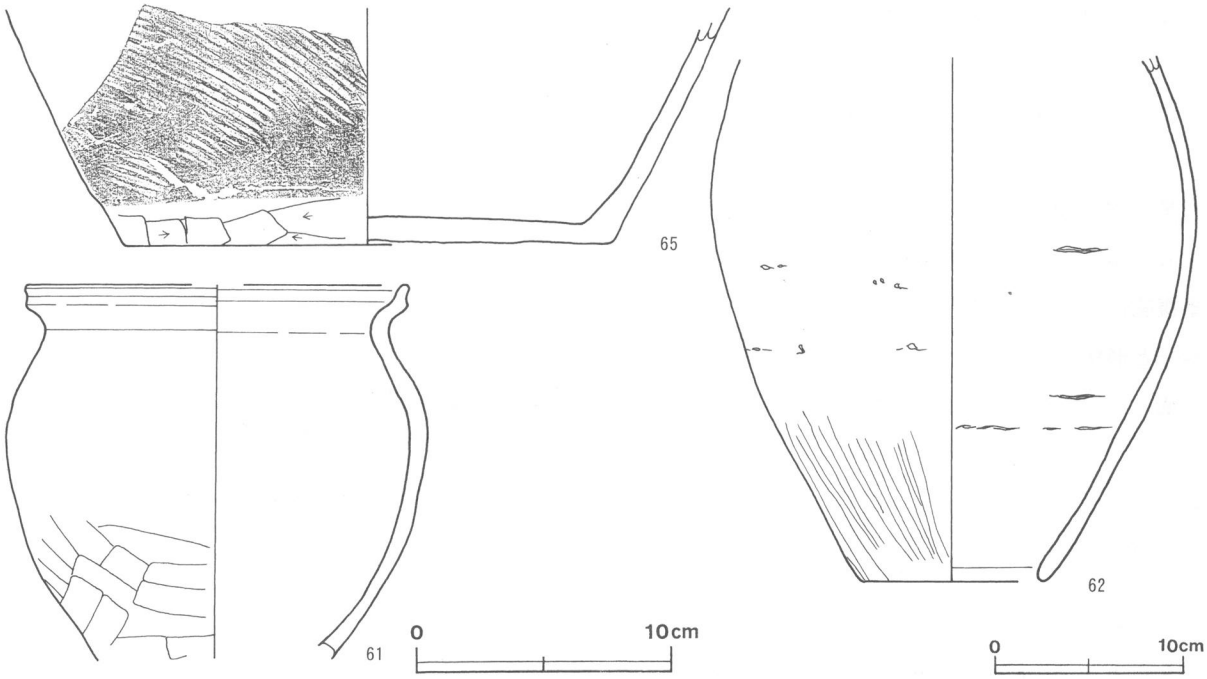
1　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量
4　極暗褐色　ロームブロック少量
5　極暗褐色　ロームブロック中量
6　暗 褐 色　ロームブロック中量

遺物　土師器片32点，須恵器片17点が出土している。第30図61の土師器甕と62の土師器甑，第31図64の須恵器蓋は竈右袖付近から，63の須恵器坏は北東コーナー部の北壁際のそれぞれ床面から出土している。第30図65の須恵器甕は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から平安時代（９世紀前葉）と考えられる。



第29図　第17号住居跡・出土遺物実測図



第30図　第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表（第29・30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
61	土師器	小形甕	[15.2]	(14.8)	—	長石・石英	灰褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面下端斜位及び横位のヘラ削り。	床面	30%
62	土師器	甑	—	(27.5)	9.4	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面下端縦位のヘラ磨き。	床面	60%　PL10
63	須恵器	坏	[12.9]	5.3	[8.0]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部外面下端回転ヘラ削り。	床面	10%
64	須恵器	蓋	[15.4]	2.3	—	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	天井部回転ヘラ削り後ナデ。	床面	30%
65	須恵器	甕	—	(9.4)	19.2	長石	灰オリーブ	普通	体部外面斜位の平行叩き，下端横位のヘラ削り。	覆土中	30%

表３　奈良・平安時代住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向（長軸）	平面形	規模(m)（長軸×短軸）	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時期	重複関係（旧→新）
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
4	A2i5	N-2°-W	長方形	5.55 × 4.08	27～36	平坦	全周	—	—	2	1	1	人為	土師器・鉄製品	奈良	
5	A2j7	不明	不明	(4.88 × 2.50)	43～57	平坦	一部	—	—	1	—	—	人為	土師器・須恵器・鉄製品	奈良	SI-6・SK2・3→本跡
7	B2a6	N-4°-W	〔方形〕	3.35 × (3.21)	49～53	平坦	全周	—	1	—	1	—	人為	土師器・須恵器	奈良	SI-16→SK12→本跡
8	B2a9	N-1°-E	方形	3.05 × 2.93	18～21	平坦	全周	—	1	—	1	—	人為	土師器・須恵器	奈良	SI-14→本跡
9	B3b1	N-7°-W	〔方形・長方形〕	4.94 × (3.35)	42～45	平坦	一部	2	—	3	1	—	自然	土師器・須恵器・石製品	奈良	
10	B3b2	N-90°-E	方形	3.00 × 2.85	28～32	平坦	一部	—	—	1	1	—	人為	須恵器	奈良	SK10→SI-11→本跡→SK14・5
15	B3d8	不明	〔方形・長方形〕	(1.60 × 1.04)	55	平坦	一部	—	—	1	—	—	人為	土師器・須恵器・鉄製品	奈良・平安	SI-13→本跡
17	B2a5	N-15°-W	〔方形・長方形〕	(3.07 × 1.89)	34	平坦	一部	—	—	—	1	—	人為	土師器・須恵器	平安	

4　近世の遺構と遺物

（1）土坑

近世と考えられる土坑１基を確認した。以下，その特徴や遺物について記載する。

第６号土坑（第31・32図）

位置　調査区の東部，Ｂ３b4 区。

重複関係　第１号溝を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸2.17m，短軸1.88mの楕円形で，深さは55cmである。

底面　平坦であり，硬化した面は認められなかった。中央部から南東側にピットが確認された。Ｐ１の深さは34cmで，その性格は不明である。

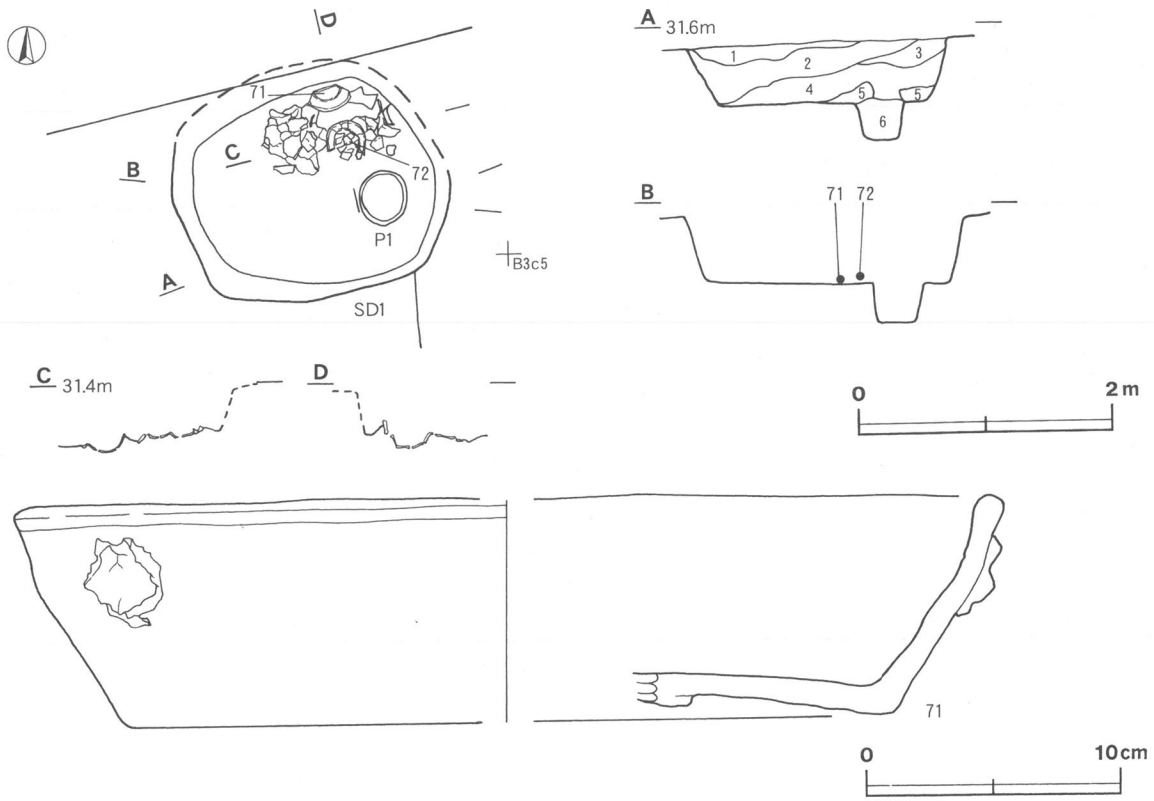
覆土　６層からなる。ロームブロックを多く含んでおり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

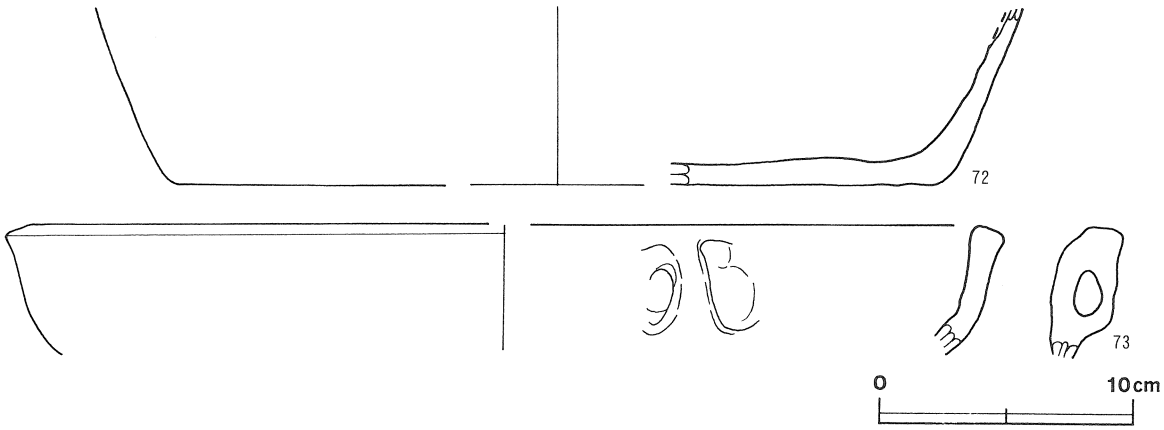
1　暗 褐 色　ロームブロック多量，黒色土ブロック中量
2　暗 褐 色　ロームブロック・黒色土ブロック多量
3　極暗褐色　ロームブロック中量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量
5　黒 褐 色　ロームブロック・黒色土ブロック少量
6　極暗褐色　ロームブロック中量

遺物　北側の底面から下層にかけて，未焼成の土器と粘土塊がまとまって出土している。第32図71～73は未焼成の内耳鍋であり，72は体部と底部が下層から逆位で，71は壁際の底面から斜位で出土している。73は覆土中から出土している。その他は細片で，また，それらが溶けあった状態の粘土塊として出土しており，復元・図示ができなかった。土器片の厚みや総量などから未焼成土器は少なくとも３個体以上あったものと推測される。

所見　遺物の出土状況から焼成前の土器を投棄した土坑と考えられるが，詳細な性格は不明である。時期は，出土土器から近世と考えられる。



第31図　第６号土坑・出土遺物実測図



第32図　第６号土坑出土遺物実測図

第６号土坑出土遺物観察表（第32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
71	未焼成土器	内耳鍋か	[38.6]	8.8	[30.0]	長石・石英・赤色粒子	灰黄	未焼成	体部外面横ナデ，粘土塊付着。	底面	40%　PL11
72	未焼成土器	内耳鍋か	—	(7.2)	[29.8]	長石・石英・赤色粒子	灰黄	未焼成	体部内面横ナデ。	覆土下層	20%　PL11
73	未焼成土器	内耳鍋	[39.3]	(5.2)	—	長石・石英・赤色粒子	暗灰黄	未焼成	体部内面横ナデ。	覆土中	5%　PL11

5　その他の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

時期不明の竪穴住居跡２軒を確認した。以下，その特徴や遺物について記載する。

第３号住居跡（第33図）

位置　調査区の西部，Ａ２i1区。

重複関係　第１号溝を掘り込み，第19号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　南西部を第19号土坑に掘り込まれており，さらに，南部が調査区域外になっているため，東コーナー部と，北東壁3.65m，南東壁0.98mが確認されている。コーナー部が直角になることから平面形は方形または長方形と推測される。主軸方向は不明である。壁高は45～50cmで，外傾している。

床　平坦である。調査区域境側に一部硬化面が認められた。

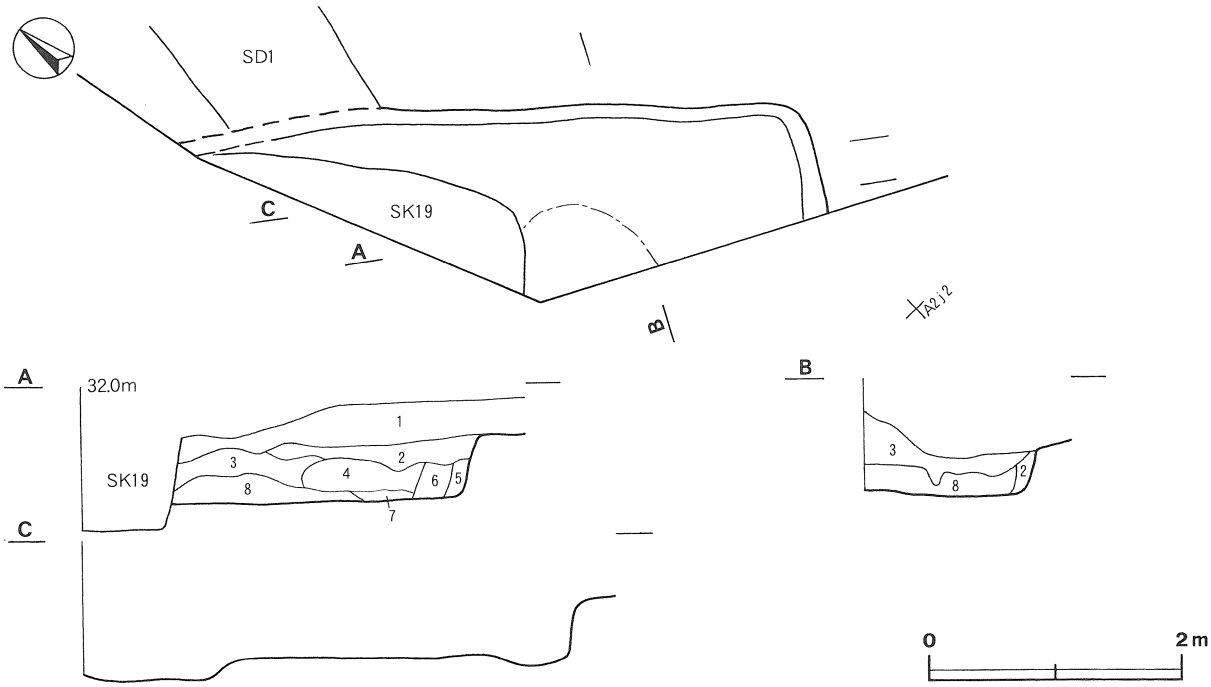
覆土　７層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。第１層は表土である。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・礫微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック少量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量
5　明 褐 色　ロームブロック中量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量
7　暗 褐 色　ロームブロック少量
8　黒 褐 色　ロームブロック微量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　確認された床面の一部に硬化面が認められることから住居跡とした。伴う土器が出土していないため，時期は不明である。



第33図　第３号住居跡実測図

第12号住居跡（第34図）

位置　調査区の東部，Ｂ３c5区。

規模と形状　大部分が調査区域外になっており，北コーナー部のみが確認された。確認された壁は，北西壁が1.40m，北東壁が1.25mであり，コーナー部が直角になることから平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向は不明である。壁高は19～23cmで，外傾している。

床　平坦である。調査区域境際に一部硬化面が認められた。壁下に壁溝が認められる。規模は，上幅10～17cm，下幅３～７cmほど，深さ４cmほどで，断面形はU字形をしている。

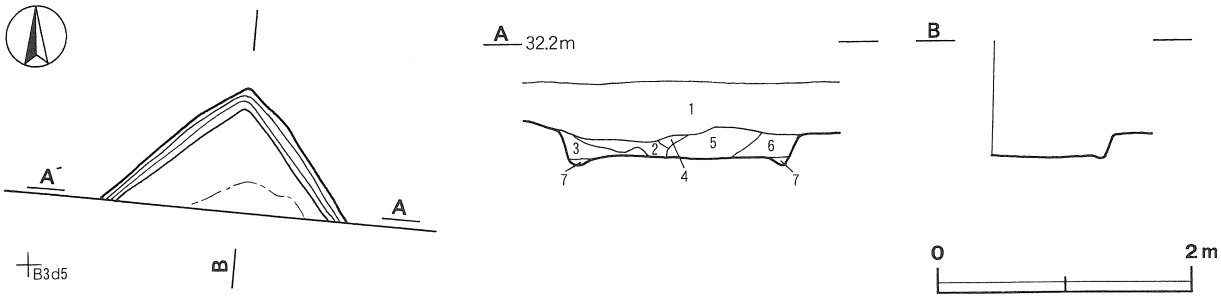
覆土　６層からなり，不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。第１層は表土である。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック中量
2　黒褐色　ロームブロック中量
3　黒　色　ロームブロック少量
4　暗褐色　ロームブロック少量
5　黒褐色　ロームブロック少量
6　暗褐色　ロームブロック少量
7　暗褐色　ロームブロック中量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　確認された床面の一部に硬化面が認められることから住居跡とした。伴う土器が出土していないため時期は不明である。



第34図　第12号住居跡実測図

表４　時期不明住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向（長軸）	平面形	規模(m)（長軸×短軸）	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	重複関係（旧→新）	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
3	A2i1	不明	不明	(3.65 × 0.98)	45～50	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	なし	SD1→本跡→SK19	
12	B3c5	不明	不明	(1.40 × 1.25)	19～23	平坦	一部	—	—	—	—	—	人為	なし		

（２）井戸跡

井戸跡１基を確認した。中世と考えられる懸仏片が出土しているが，正確な時期を判断する土器が出土していないため，時期不明の井戸跡とした。以下，その特徴や遺物について記載する。

第１号井戸跡（第35･36図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２e9 区。

重複関係　第14号住居跡を掘り込んでいる。

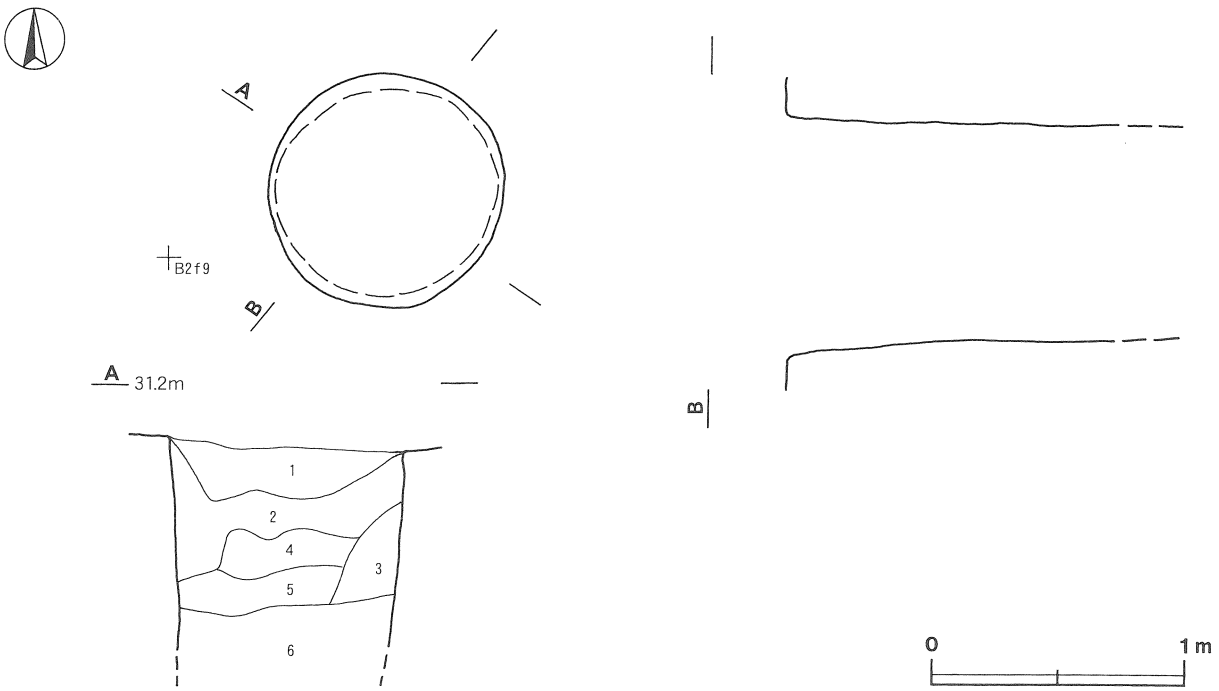
規模と形状　平面形は径0.94ｍの円形であり，円筒形状に掘り込まれている。確認面から0.9ｍまで掘り下げて調査を行った。

覆土　６層からなる。粘土がブロック状に堆積していることから人為堆積と思われる。

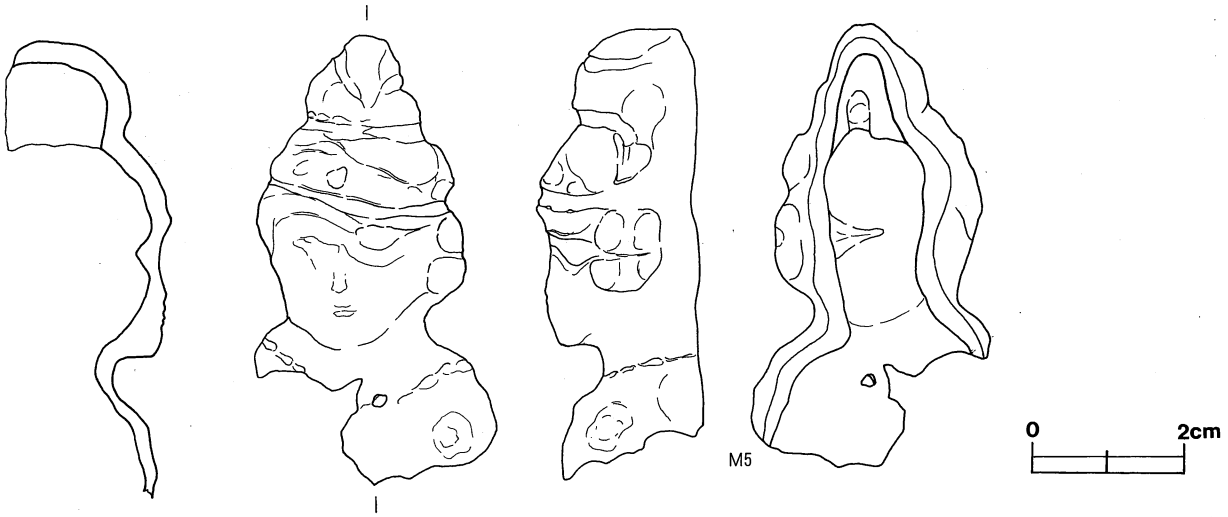
土層解説
1　黒褐色　粘土ブロック・砂少量，ロームブロック微量
2　黒褐色　粘土ブロック多量
3　褐　色　粘土ブロック・砂中量
4　暗褐色　砂中量，ロームブロック少量
5　暗褐色　粘土ブロック・砂中量
6　褐　色　粘土ブロック多量，砂中量

遺物　土師器片10点，須恵器片７点，金属製品（懸仏）１点が出土している。土器片はいずれも覆土中の細片である。第36図Ｍ５の懸仏片は覆土中から出土している。

所見　中世と考えられる懸仏片が出土しており，時期はそれ以降と考えられるが，他に判断できる土器が出土していないため正確な時期は不明である。



第35図　第１号井戸跡実測図



第36図　第１号井戸跡出土遺物実測図

第１号井戸跡出土遺物観察表（第36図）

番号	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M5	懸仏	(5.9)	(3.2)	(2.1)	(48.1)	銅	菩薩頭部残欠，火熱による破損。	覆土中	PL12

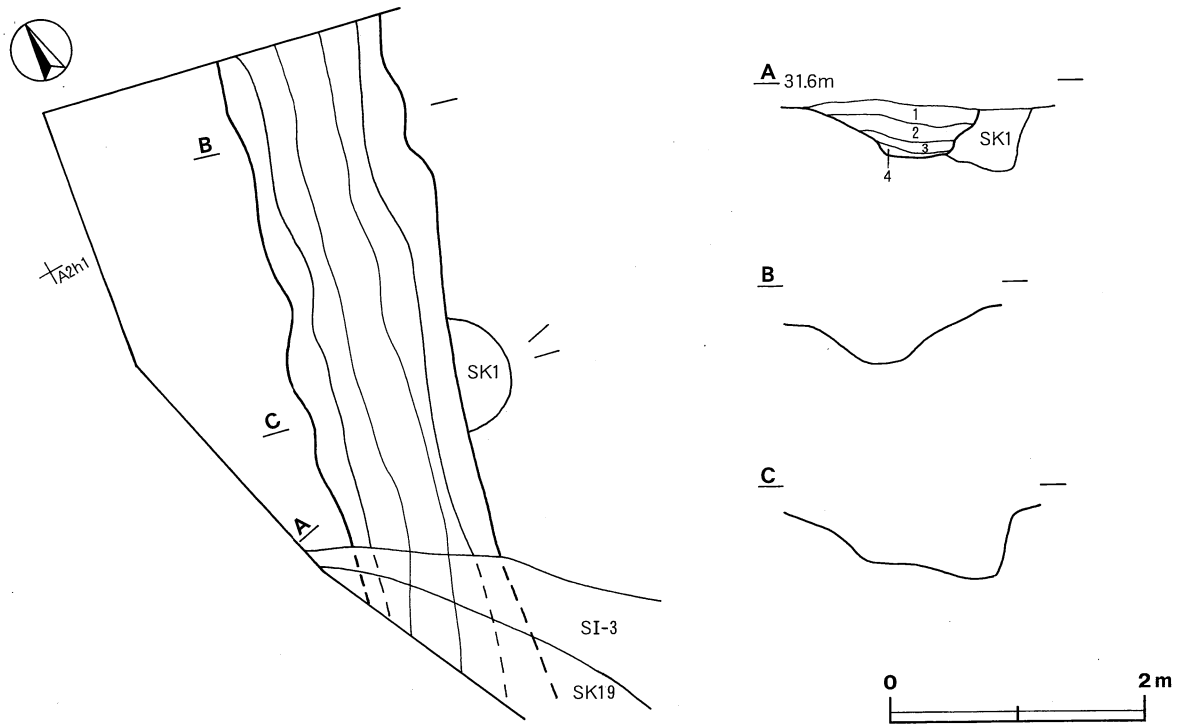
（３）溝

調査区内から２条の溝を確認した。ともに時期を特定できる出土遺物がないために性格や時期は不明である。以下，その特徴について記載する。

第１号溝（第37図）

位置　調査区西部，Ａ２g1～Ａ２h1区。

重複関係　第１号土坑を掘り込み，第３号住居跡及び第19号土坑に掘り込まれている。



第37図　第１号溝実測図

規模と形状　確認できた全長は5.20m，上幅1.12～1.42m，下幅0.28～0.37m，深さ0.30mほどである。断面形はゆるやかなU字形である。

方向　北東方向から南西方向（N－16°－E）に直線的に延びている。

覆土　４層からなり，ロームブロックを含んでいることから人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量

遺物　弥生土器片３点，土師器片126点，須恵器片47点，陶磁器片２点が出土している。いずれも細片であり図示できなかった。

所見　弥生時代から近世までの時期幅のある遺物が出土しており，また，確認された範囲も一部であり，時期とその性格は不明である。

第２号溝（第38図）

位置　調査区の東部，Ｂ３b4～Ｂ３c4区。

重複関係　第６・７・11号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　確認できた全長は2.96m，上幅0.98～1.34m，下幅0.29～0.37m，深さ0.25～0.37mである。断面形はゆるやかなU字形である。

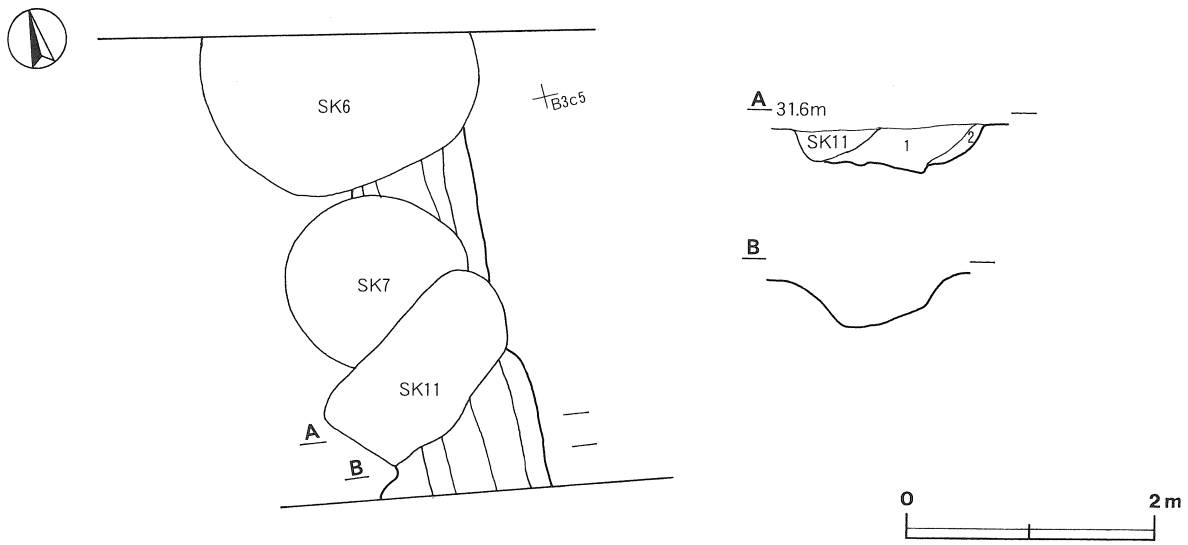
方向　ほぼ南北（N－２°－E）に直線的に延びている。

覆土　２層からなる。ロームブロックを含んでいることから人為堆積と思われる。

土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック中量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量

遺物　弥生土器片３点，土師器片82点，須恵器片38点，陶磁器片２点が出土している。いずれも細片であり図示できなかった。

所見　弥生時代から近世までの時期幅のある遺物が出土しており，また，確認された範囲も一部であり，時期とその性格は不明である。



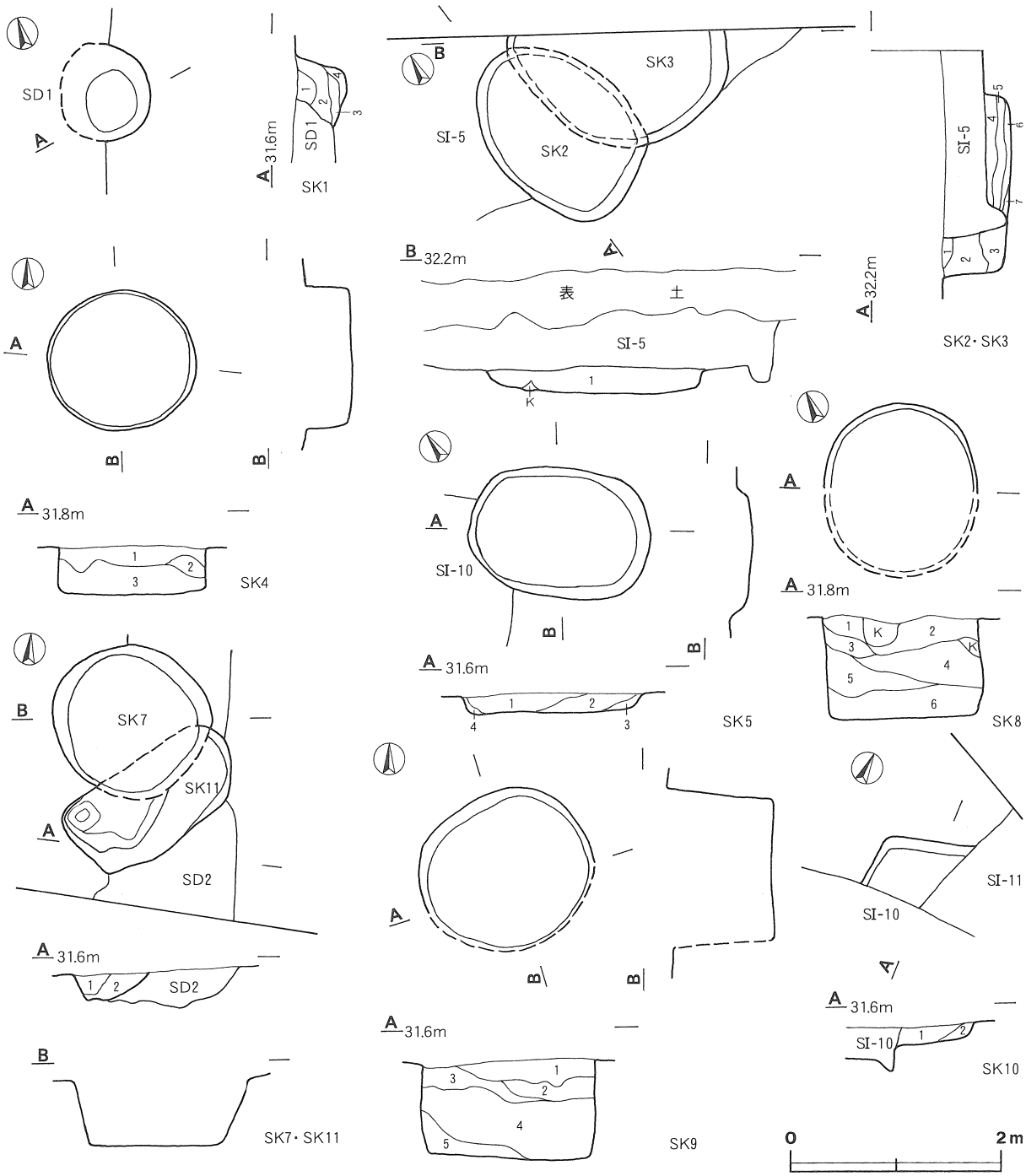
第38図　第２号溝実測図

表５　時期不明溝一覧表

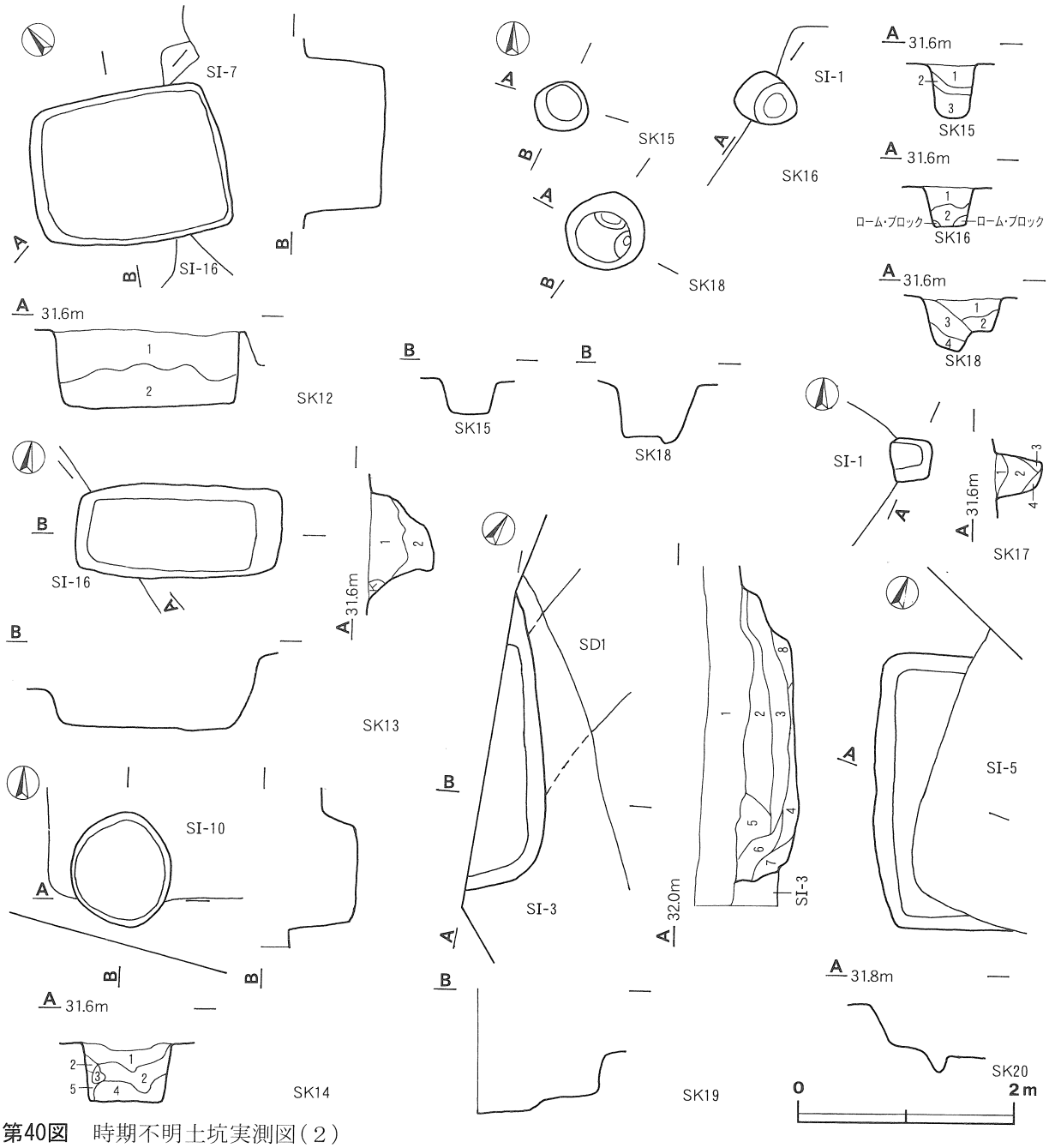
溝番号	位　置	方　向	形 状	規　模(m)				断面	底面	覆土	出土遺物	重複関係(旧→新)
				確認長	上　幅	下　幅	深　さ					
1	A2gl～A2hl	北東～南西	直線状	(5.20)	1.12～1.42	0.28～0.37	0.30	U字形	皿状	人為	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器	SK1→本跡→SI-3・SK19
2	B3b4～B3c4	北～南	直線状	(2.96)	0.98～1.34	0.29～0.37	0.25～0.37	U字形	皿状	不明	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器	SK6・7・11

（４）土坑

今回の調査で，遺物が出土していないか，または出土遺物が細片で少ないために，時期や性格が不明である土坑19基を確認した。ここでは，それらの土坑を一覧表及び実測図で掲載する。



第39図　時期不明土坑実測図（１）



第40図　時期不明土坑実測図（２）

第１号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量
3　黒 褐 色　ロームブロック・礫微量
4　褐　　色　ロームブロック中量

第２号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　黒 褐 色　ロームブロック多量，粘土ブロック中量
5　黒 褐 色　ロームブロック多量
6　暗 褐 色　ロームブロック少量
7　暗 褐 色　ロームブロック少量

第３号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック多量

第４号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量，砂微量
2　黒　　色　ロームブロック微量
3　極暗褐色　ロームブロック多量，砂微量

第５号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック中量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量
3　極暗褐色　ロームブロック微量
4　暗 褐 色　砂少量，ロームブロック微量

第８号土坑土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
2　黒　　色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　焼土ブロック中量
4　褐　　色　ロームブロック多量
5　暗 褐 色　ロームブロック中量
6　暗 褐 色　ロームブロック多量

第９号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量
2　暗 褐 色　ロームブロック多量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量
4　暗 褐 色　ロームブロック多量
5　黒 褐 色　ロームブロック少量

第10号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック中量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量

第11号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック中量
2　黒 褐 色　ロームブロック微量

第12号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック中量
2　暗 褐 色　ロームブロック多量

第13号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック多量
2　暗 褐 色　ロームブロック多量

第14号土坑土層解説
1　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
2　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
3　極暗褐色　炭化物中量，ローム粒子・焼土粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
5　明 褐 色　ローム粒子多量

第15号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　ロームブロック中量
3　黒 褐 色　ロームブロック微量

第16号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子微量

第17号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック中量，粘土ブロック微量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量
3　暗 褐 色　ロームブロック多量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量

第18号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　ロームブロック微量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量
4　黒 褐 色　ロームブロック微量

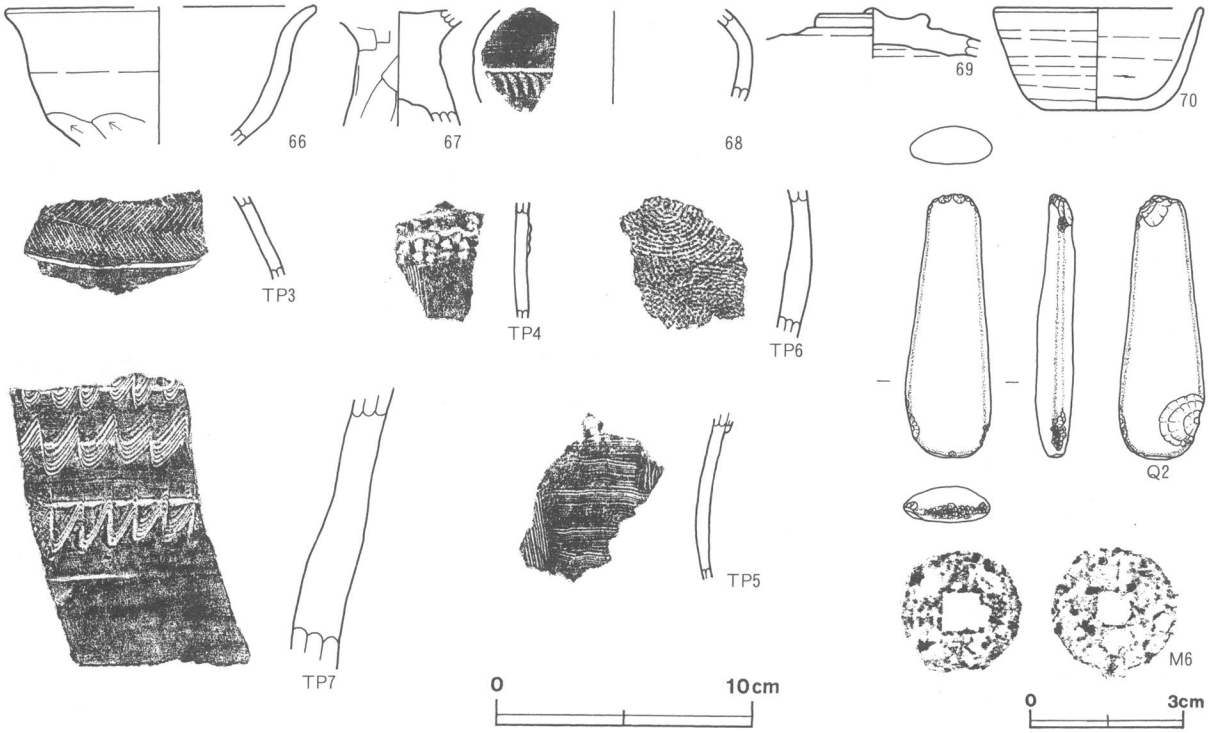
第19号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量　　（表土）
2　黒 褐 色　ロームブロック少量
3　暗 褐 色　ロームブロック微量
4　黒 褐 色　ロームブロック少量
5　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量
6　極暗褐色　ロームブロック少量
7　極暗褐色　ロームブロック微量
8　極暗褐色　ロームブロック微量

表６　時期不明土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	重複関係（旧→新）
1	A2h1	N－4°－W	楕円形	0.96 × 0.87	49	外傾	皿状	人為	土師器片	本跡→SD1
2	A2j7	N－22°－W	楕円形	1.77 × 1.33	58	外傾	平坦	人為	土師器片	本跡･SK3と重複→SI-5
3	A2j8	N－19°－W	〔隅丸長方形〕	(1.32) × 1.76	－	外傾	皿状	人為	土師器片	本跡･SK2と重複→SI-5
4	B3c5	－	円形	1.04 × 1.35	45	直立	平坦	人為	弥生土器，土師器片	
5	B3b3	N－41°－W	楕円形	1.71 × 1.20	18	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI-10→本跡
7	B3c4	－	円形	1.45 × 1.40	60	外傾	平坦	－	土師器片，須恵器片	SD2→SK11→本跡
8	B2a8	N－29°－E	〔楕円形〕	〔1.65〕× 1.47	96	直立	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
9	A2i2	－	円形	1.57 × 1.53	100	直立	平坦	人為	土師器片	
10	B3b2	－	不明	(0.70 × 0.65)	15	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	本跡→SI-11→SI-10
11	B3c4	N－55°－E	隅丸長方形	1.70 × 0.80	56	直立	凹凸	人為		SD2→本跡→SK7
12	A2j6	N－56°－W	長方形	1.76 × 1.41	73	直立	平坦	人為	土師器片	SI-16→本跡→SI-7
13	B2a7	N－76°－E	長方形	1.89 × 0.89	65	外傾	凹凸	人為		SI-16→本跡
14	B3c2	N－10°－E	楕円形	1.05 × 0.93	55	直立	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI-10→本跡
15	A2h2	－	円形	0.50 × 0.50	50	直立	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
16	A2h2	－	楕円形	0.56 × 0.48	40	外傾	平坦	人為		SI-1と重複
17	A2h2	－	不明	(0.40) × 0.39	49	外傾	凹凸	人為		SI-1と重複
18	A2h2	－	円形	0.75 × 0.75	50	外傾	凹凸	人為		
19	A2i1	不明	不明	(2.00 × 0.60)	48～50	外傾	凹凸	人為		SD1→SI-3→本跡
20	A2j7	不明	不明	2.55 × (0.82)	35～38	外傾	平坦	人為		

（5）遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない弥生時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち特徴的なものについて拓影図・実測図及び観察表を掲載する。



第41図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
66	土師器	坏	[12.2]	(5.5)	—	雲母・長石	橙	普通	口縁部内・外面ナデ，体部外面ヘラ削り。	遺構外	10%
67	土師器	高坏	—	(4.6)	—	雲母・長石	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ削り。	遺構外	10%
68	須恵器	瓶	—	(3.6)	—	長石	黄灰	普通	櫛歯状工具による刺突有り。	遺構外	5%
69	須恵器	蓋	—	(1.8)	—	雲母・長石・石英	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り。	遺構外	10%
70	須恵器	坏	8.3	4.1	4.5	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り，底部ヘラ削り。	遺構外	80%　PL11
TP3	弥生土器	広口壺	—	(3.7)	—	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	附加条縄文を羽状に施文。	遺構外	
TP4	弥生土器	広口壺	—	(4.5)	—	雲母・長石・石英	明褐	普通	3本の隆帯。	遺構外	
TP5	弥生土器	広口壺	—	(6.3)	—	雲母・長石・石英	橙	普通	櫛歯状工具による縦区画内に波状文を施文。	遺構外	
TP6	須恵器	甕	—	(5.8)	—	雲母・長石	灰褐	普通	同心円状の叩き。	遺構外	
TP7	須恵器	甕	—	(11.4)	—	雲母・長石・石英	灰褐	普通	櫛歯状工具による波状文を施文。	遺構外	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	敲石	10.4	3.4	1.5	68.4	粘板岩	上下二か所に使用痕有り。	遺構外	PL12

番号	器種	長さ	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	古銭	—	2.4	0.1	3.4	銅	寛永通寶ヵ，背面不明。	遺構外	PL12

第４節　ま　　と　　め

今回の調査によって，弥生時代の住居跡１軒，古墳時代の住居跡５軒，奈良・平安時代の住居跡８軒，近世の土坑１基，時期不明の住居跡２軒，土坑19基，井戸跡１基，溝２条を確認した。ここではそれぞれの時期ごとに遺構と遺物について概要を述べ，まとめとしたい。

１　縄文時代から弥生時代

縄文時代の遺構は確認されなかった。深鉢と考えられる細片が遺構外から数点出土しているのみで，縄文時代の様相は明らかでない。弥生時代の住居跡が調査区の西部から１軒確認された。調査区域外に同時期の住居跡が存在している可能性が考えられる。

２　古墳時代

古墳時代の住居跡５軒（５世紀後葉１軒，６世紀前葉１軒，後葉２軒，不明１軒）は，調査区全域から確認されている。１軒を除いて他は調査区域外にかかっているため全容は明らかではないが，一辺の壁が６ｍを超えるものが１軒で竈は北竈，５ｍを超えるものが２軒で竈はいずれも北西竈，４ｍ未満のものが一軒，規模が不明のものが一軒で，ともに想定される竈の位置は調査区域外になっている。この時代の集落も，調査区域外に広がっている可能性が考えられる。６世紀前葉と考えられる第13号住居跡の北壁際の床面から，土師器坏が三枚ずつ重ねられた状態で二組，その脇に一枚が正位で出土していることが特筆される。

３　奈良・平安時代

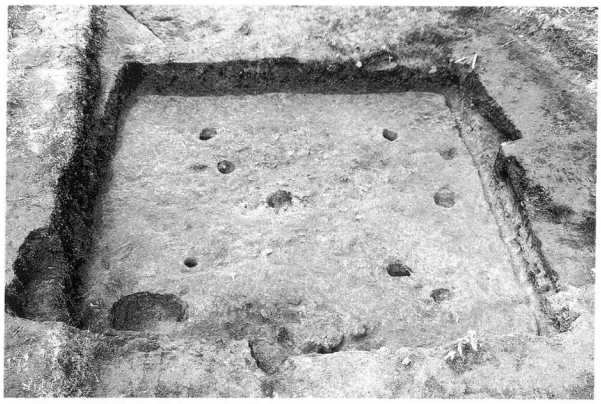
古墳時代と同様に調査区域全域から住居跡８軒（８世紀前葉１軒，中葉２軒，後葉３軒，９世紀前葉１軒，不明１軒）が確認されており，当遺跡の中心をなす時期である。３軒を除いて他は調査区域外にかかっている。竈が確認できる住居跡のうち５軒が北竈，１軒が東竈である。特筆される住居跡として，第４号住居跡があげられる。平面形は東西に長い長方形であり，北壁の中心から東寄りに竈をもっている。東壁の中央部に地山を掘り残し突出した施設をもち，その北側の床面に硬化面が確認されている。

４　中・近世

中世と考えられる懸仏が第１号井戸跡の覆土中から出土している。井戸跡の時期は判断できる土器が出土していないため不明である。懸仏は菩薩頭部の残欠であり，被熱により破損している。懸仏は神仏習合の思想に基づくものであるが，他にそれに関わる遺物は出土していない。また，近世と考えられる土坑から未焼成の内耳鍋が出土している。土坑の平面形は楕円形で，ピットをもち，底面は平坦で硬化面や熱を受けた面は認められない。焼成前の土器を投棄した土坑と考えられるが，その性格は不明である。

以上のように，縄文時代・弥生時代はわずかながら人々が生活していた痕跡がうかがえる。その後，古墳時代から奈良・平安時代にかけて集落が営まれ，中・近世になるとわずかな足跡が確認されるのみになる。これらのことから，今回の調査の結果，当遺跡は，古墳時代及び奈良・平安時代を中心とする縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡であることが判明した。

写　真　図　版

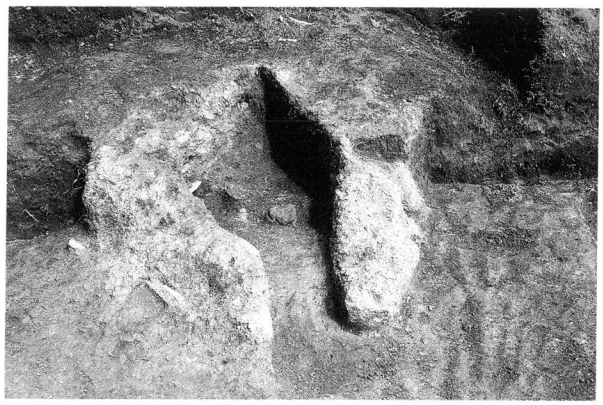


第１号住居跡完掘状況

第１号住居跡遺物出土状況

第２号住居跡完掘状況

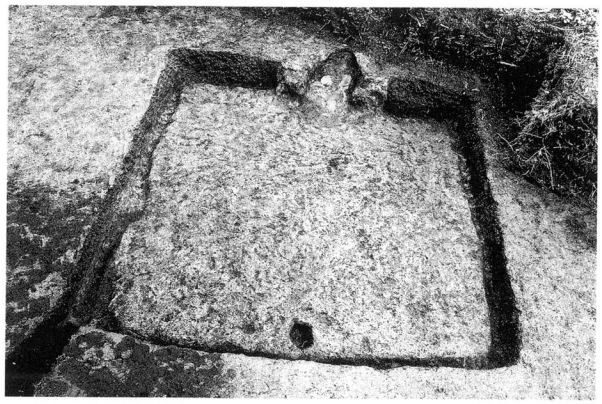
第４号住居跡完掘状況



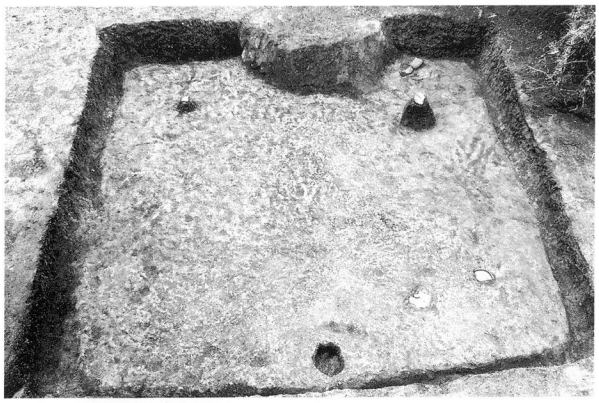
第４号住居跡竈完掘状況

第７・16号住居跡完掘状況

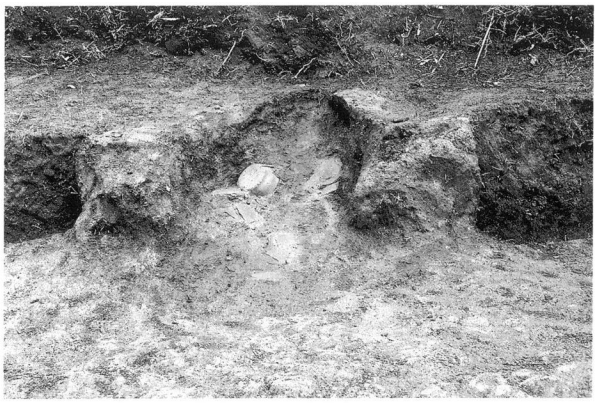
第７・16号住居跡遺物出土状況



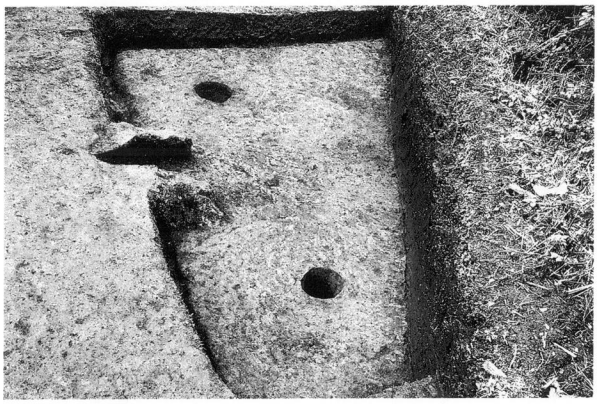
第８号住居跡完掘状況



第 8 号住居跡遺物出土状況

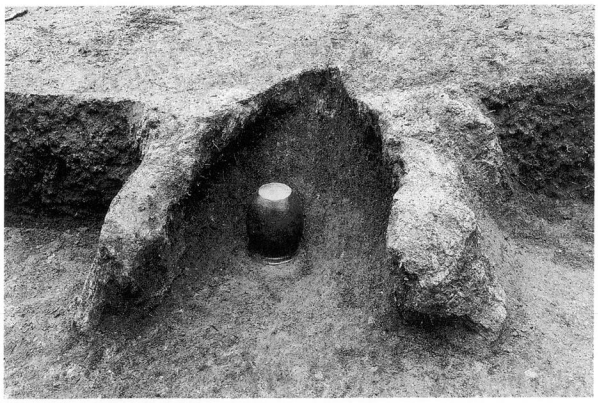


第 8 号住居跡竈遺物出土状況



第 9 号住居跡完掘状況

第 9 号住居跡遺物出土状況



第 9 号住居跡竈遺物出土状況

第13・15号住居跡遺物出土状況

第13号住居跡遺物出土状況

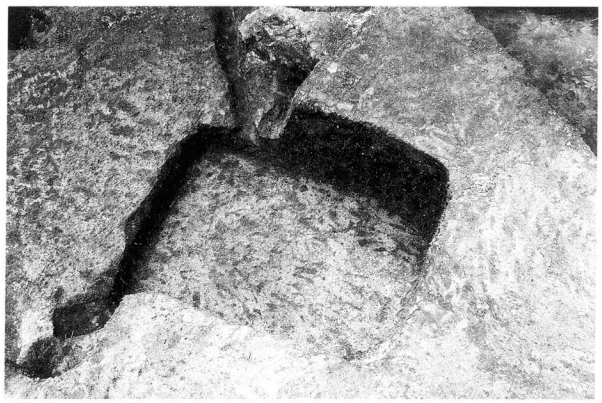
第15号住居跡完掘状況

第14号住居跡完掘状況

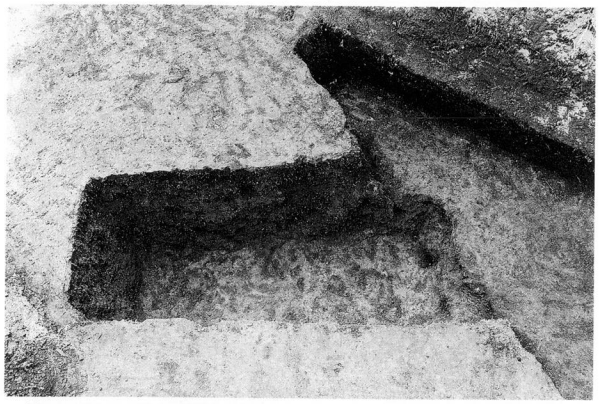
第14号住居跡遺物出土状況

第17号住居跡完掘状況

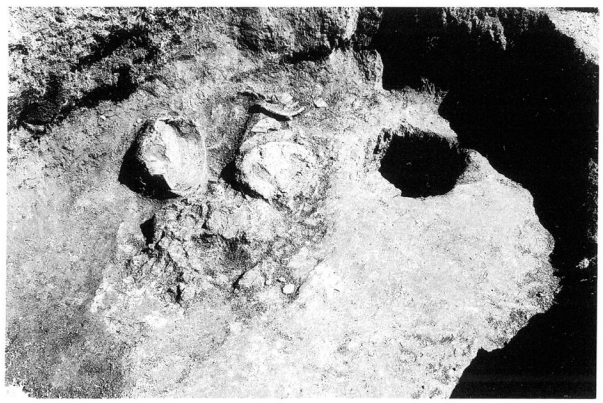
第17号住居跡遺物出土状況



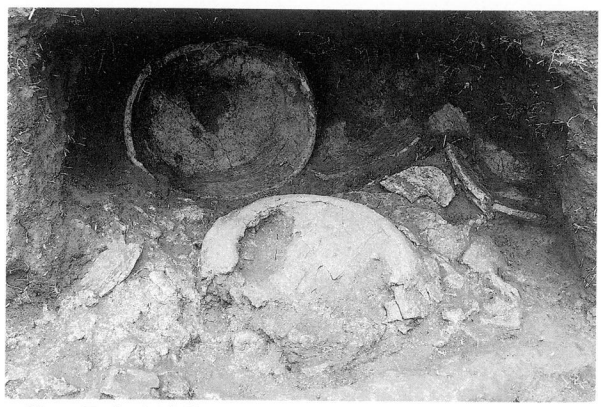
第12号土坑完掘状況



第13号土坑完掘状況



第 6 号土坑遺物出土状況



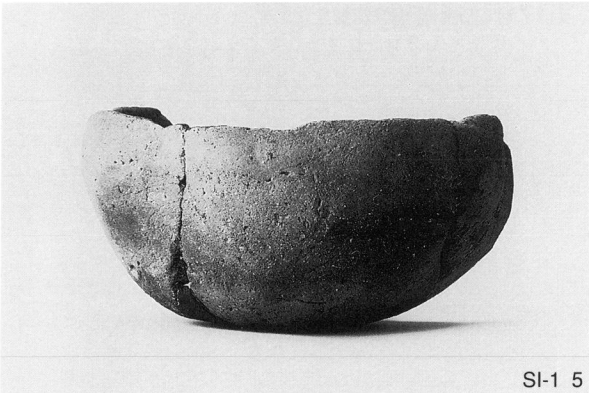
第 6 号土坑遺物出土状況

SI-1 1

SI-1 2

SI-1 3

SI-1 4


SI-1 5

SI-1 6

SI-2 13

SI-1 7

第２・１号住居跡出土遺物

SI-1 8

SI-1 9

SI-1 10

SI-1 11

SI-1 12

SI-11 40

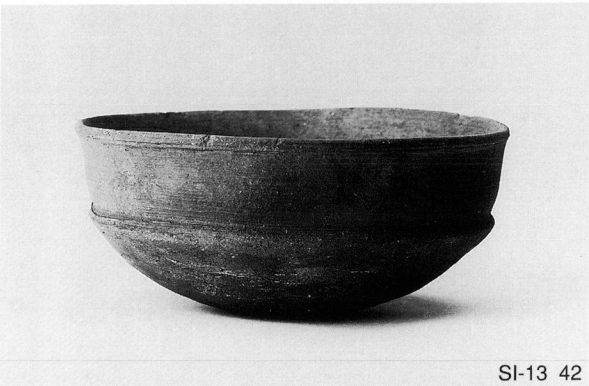
第１・11号住居跡出土遺物

SI-11 35

SI-11 36

SI-11 37

SI-13 41


SI-13 42

SI-13 43

SI-11 39

SI-11 38

第11・13号住居跡出土遺物

SI-13 44

SI-13 45

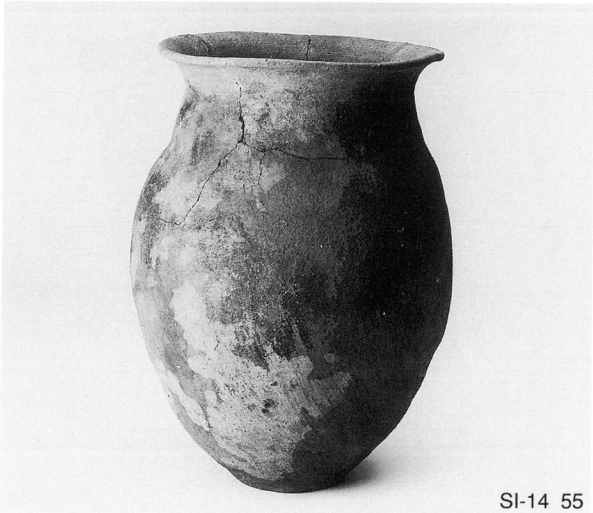
SI-13 46

SI-13 47

SI-14 48

SI-14 49

SI-14 54


SI-14 55

第13・14号住居跡出土遺物

SI-14 56

SI-14 57

SI-14 58

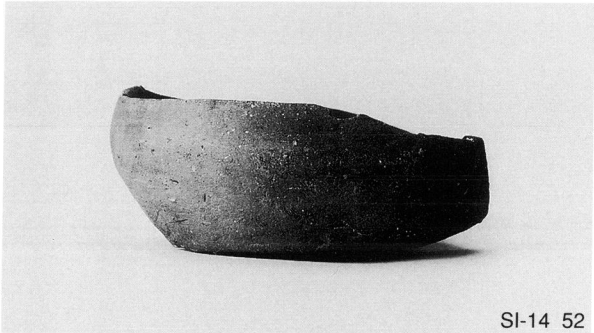
SI-14 60

SI-14 59

第14号住居跡出土遺物

SI-14 50

SI-14 51

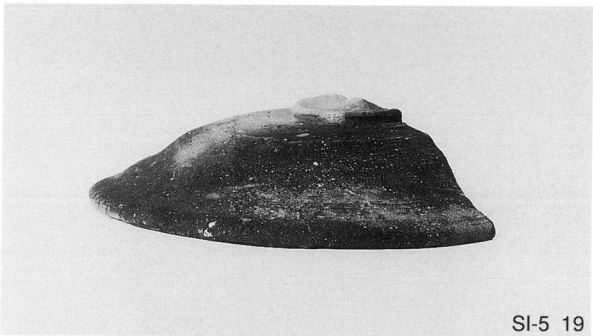

SI-14 52

SI-14 53

SI-4 14

SI-4 15

SI-4 16


SI-5 19

SI-5 18

SI-4 17

第14・4・5号住居跡出土遺物

SI-7 20

SI-7 21

SI-7 22

SI-8 23

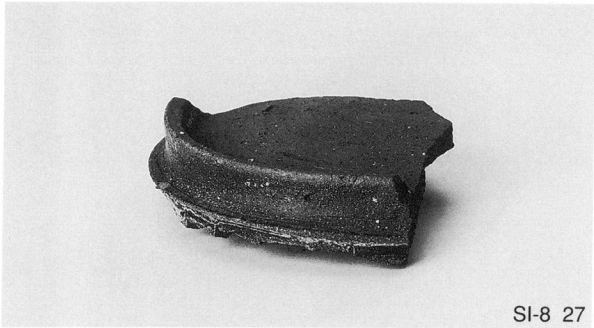
SI-8 24

SI-8 25

SI-9 28

SI-17 62

第７・８・９・17号住居跡出土遺物


SI-8 27

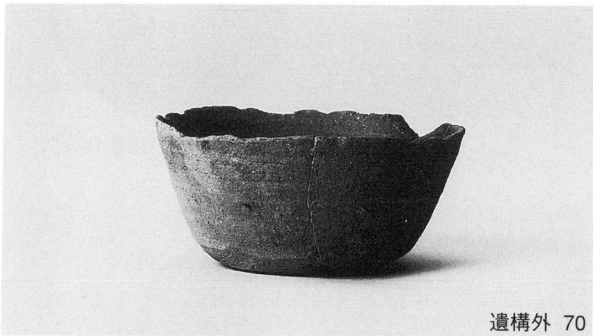
SI-9 29

SI-10 30

SI-10 31

SI-10 32

SI-10 33

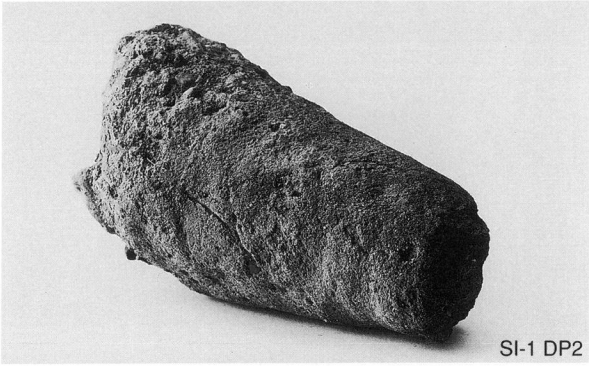

遺構外 70

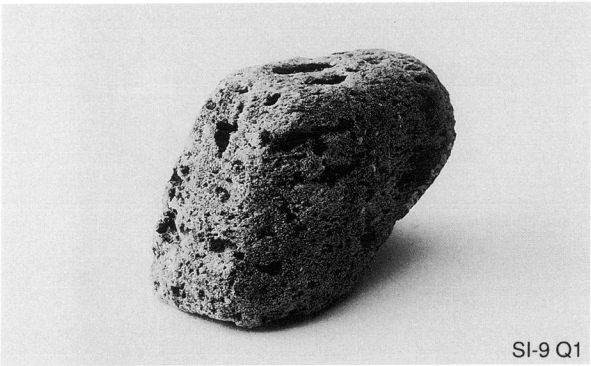
SK6 71

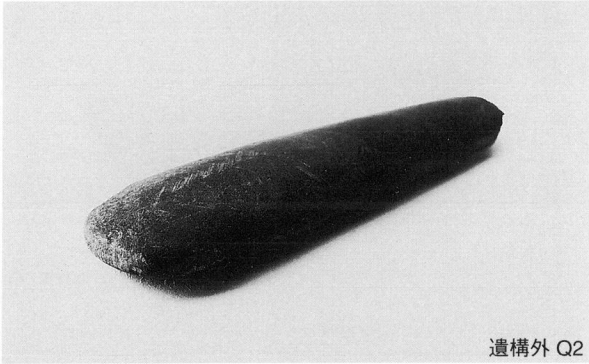
SK6 72

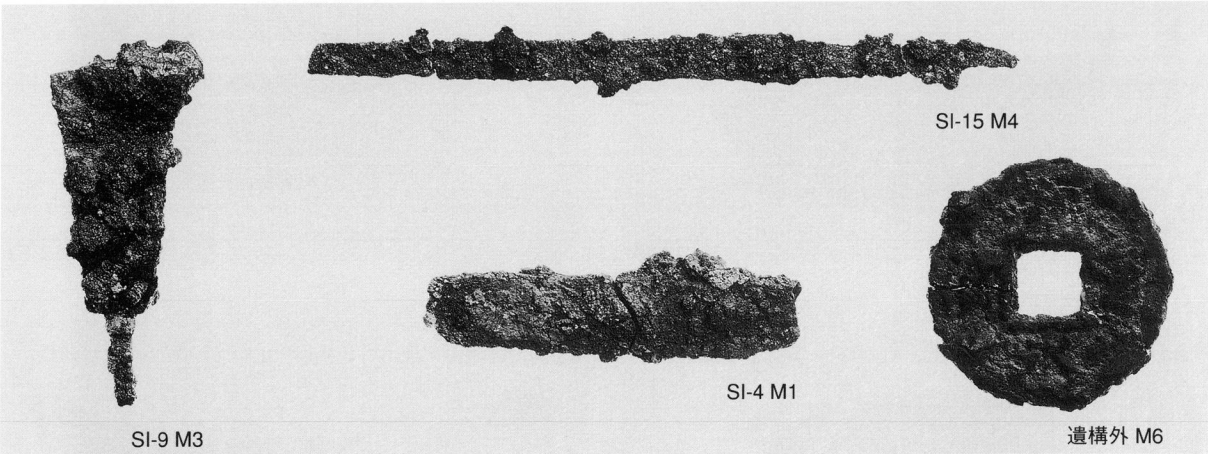
SK6 73

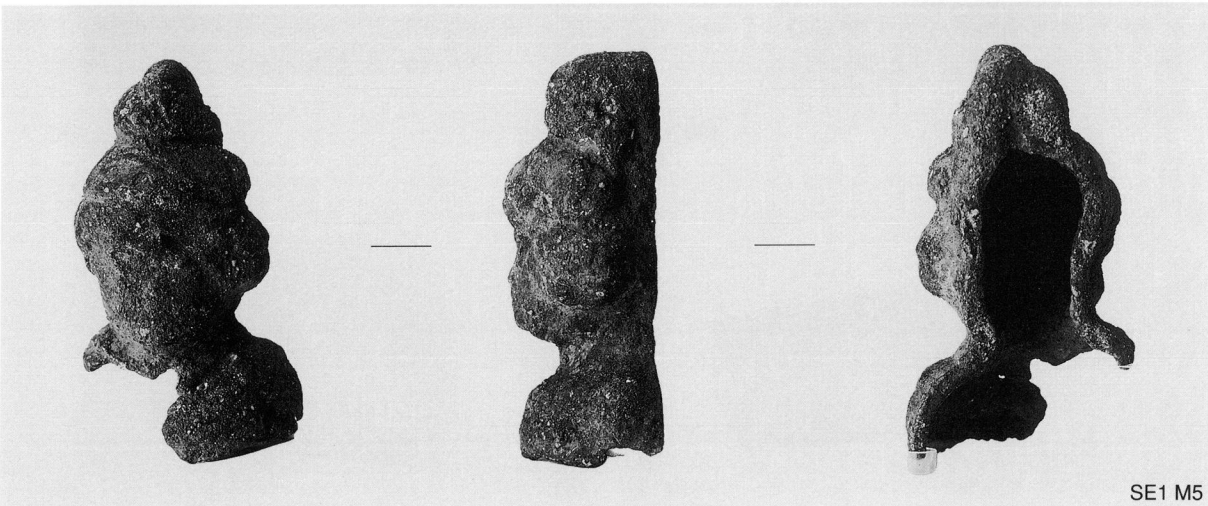
第８・９・10号住居跡，第６号土坑，遺構外出土遺物











第１・４・９・15号住居跡，第１号井戸跡，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第205集

岡の宮遺跡

平成15(2003)年3月20日印刷
平成15(2003)年3月26日発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸市生涯学習センター分館内
TEL　029-225-6587

印刷　山三印刷株式会社
〒311-4153　水戸市河和田町4433の33
TEL　029-252-8481